



## 総長回章 第二号

---

# 会の精神はマリアの精神

第二部：マリアと共なるミッションにて

---

マヌエル・ホセ・コルテス、SM  
マリア会第十四代総長

2008年3月31日  
神のお告げの祭日

## 目次

1. マリアの“僕、奉仕者”(としてのマリアニスト) .....	6
2. マリアのミッションは教会のミッション .....	9
3. 教会への奉仕に於ける私たちマリアニストのミッション .....	12
4. 教会のミッションに対するマリアニストミッションの特別な貢献 .....	17
4. 1 “先立っての現存” .....	20
4. 2 貧しさに対する同情に溢れ、希望に満ちた配慮 .....	26
4. 3 主の言葉に対する信仰の従順を求める熱意 .....	32
4. 4 共同体のあかし .....	37
5. マリアニストの福音宣教におけるマリア .....	45

## 会の精神はマリアの精神

### 第二部： マリアと共なるミッションにて

親愛なる兄弟の皆さん、

“マリアと共にキリストの中に”と題した第一部から一年後の今、“会の精神はマリアの精神”という私たちのカリスマについての考察を完成する第二部を、お約束どおりにここにお届けいたします。私たちのマリアニスト生活の刷新のためにささやかな貢献が出来ることを願って、これを皆様にお届けするしだいです。第一部と第二部の間に置かれた期間が、皆様に第一部をじっくりと吸収することを可能にしてくれたことと私は希望しております。それは第二部を正しく理解するための条件だからです。それが第一部と第二部を分けてお届けしようとした私の意向でもありました。

私は第一部を私たちとキリストとの一致について捧げました。『生活の規則』が私たちに思い起こさせているように、私たちの修道者としての存在と生活の全てはこの秘義から出てくるのです。私は福者ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードが理解し、生きたように、キリストとの一致の中でマリアが演ずる役割を考察しました。何故なら、まさにここに、私たちのマリアニストとしてのカリスマのルーツがあるからです。ただ、私たちは更に、この同じルーツから湧き出て、私たちの生活において同じく本質的なものであるこのカリスマの持つ宣教的な次元を考察することが必要です。

私たちのキリストとの一致、キリストとの一体化は、同時にキリストの使命（ミッション）に私たちを一体化させ、私たちを神の国の奉仕者、福音の宣教者へと変容させます。“キリストに似た者になること、および**神の国の到来のために尽力することがマリアニストの目的である**”と

『生活の規則』は断言していますが、それはキリストが“すべての人の救いのためにマリアの子となられた神の子”だからです。<sup>1</sup> 私たちのキリストとの一致は、人類の救いのために私たちが自分の人生をキリストに賭けることを意味しています。ですから、私たちの生活の宣教的次元は本質的な要素であり、だからこそ、私たちがこれを生き、豊かなものにするのに失敗が許されないものなのです。私たちは、自分の本性そのものからからして、宣教師なのです。“あなた方は皆、宣教師であり、救いの奉仕者なのです”と創立者はしばしば繰り返していました。これは死に至るまでそうなのです。

このシャミナード神父のモットーと、宣教への彼の熱情に関する思索は、この回章を書き上げている間中、私の念頭を去ることはありませんでした。この二つは、創立者がサラゴサの追放から戻った際にローマ聖座から与えられた“教皇派遣宣教師” (Missionary Apostolic) という称号に格別の愛着を抱いていたという事実を、独特な形で私に思い起こさせてくれました。創立者にとってこの称号はあまりにも大切な意味を持っていたので、創立者は教皇聖下に彼の後継者たちがこの称号を受け継ぐ恩典を求めたのですが、それは会には宣教以外の存在理由がないことを彼らが常に念頭に置くためだったのです。グレゴリオ十六世聖下はこの請願に対して教皇書簡でもって答えられました。この書簡は、シャミナード師の使徒的精神と師の遂行しつつある優れた事業を多とされ、幾つもの恩典に加えて、シャミナード師とその後継者たちが永久にこの称号を引き継ぐことを承認されたのでした。<sup>2</sup>

この教皇書簡は、シャミナード師がマリアニスト召命の持つ使徒的性格をもう一度私たちに思い起こさせる機会となりました。自らの後継者たちのために“教皇派遣宣教師”の称号を求めたということは、後継者たちを個人的特権、個人的名誉で飾るためではなく、むしろ、マリア会全体、すべての兄弟たち、彼らの全ての活動にとってのシンボルとするためなのです。この“特典のしるし”が与えられたことをマリア会に知ら

---

<sup>1</sup> 『生活の規則』2条.

<sup>2</sup> 1839年12月3日の教皇書簡 (AGMAR 1G1, 1.9) 参照.

せる回章の中で、師は喜びにあふれて書いています：“私自身が帯びる榮譽に浴したこの教皇派遣宣教師という称号とその特質は、**私たちの事業は宣教であり**、イエス・キリストの使徒職から流れ出て、それへ参与するものであることを、私の後継者にいつまでも思い起こさせるものとなるでしょう。**私たち全員が宣教師なのです**。信徒修道者も汚れなきマリア修道会のシスターたちも宣教師であり、全員が聖座の認めた宣教師なのです。”<sup>3</sup>

私たちの創立者がこれほど繰り返し強調する宣教への呼びかけは、現代世界にあって特に緊急なものとなっています。最近開かれたどの総会もこの点を根気強く繰り返しています。『宣教と文化』(1991)、『希望の中の連帯』(1996)、『聖霊に派遣されて』(2001)、『マリアと共なるミッションにて』(2006)はどのテキストも明確な宣教的な観点を示しており、使徒的な創造性と大胆さをもって、私たちのカリスマの視点から現代世界における“新しい福音宣教”のチャレンジに改めて応えるよう招いています。

ですから、私たちは自分たちの召命から生じる**宣教的熱意**を刷新し、再活性化せねばなりません。そのためには、私たちはその源泉にまで降りて、生命を与える精神という水を飲む必要があります。これは私たち全員が勇気を持って取り組まなければならない困難な課題です。このような取り組みをすることにおいてのみ、私たちは、聖霊が今、ここで私たちに求めておられることに忠実であることができるのです。以下に述べる考察は、この困難な課題に対してささやかな貢献となることを願っているものです。これが皆様の助けとなることを私は心より祈っております！

---

<sup>3</sup> この文章は続けて次のように言っています：ですから、総長は、— 以上の観点から、マリア会の司祭と信徒修道者及び汚れなきマリア会の修道女は、総長の代理者または彼(彼女)から派遣された者なのですが — 特に、教皇聖下から今まで以上に認められ、また、神の教会において自分自身の名で、また、会員を通して果たしている使命の持つ聖なる性格を聖下からいただく必要があったのです。これが私がこの恩典を求めた理由ですし、また、教皇書簡の中でこの特典が意味するものなのです。(1840年3月8日の回章, n. 2)

この回章は次の5部からなっています：

1. マリアの“僕、奉仕者”（としてのマリアニスト）
2. マリアのミッションは教会のミッション
3. 教会の奉仕に於ける私たちマリアニストのミッション
4. 教会のミッションに対するマリアニストミッションの特別な貢献
5. マリアニストの福音宣教におけるマリア

最初の1～3部は、私たちのミッションが位置しているカリスマ的、教会的な枠組みを確認しようとするものです。一番長い第4部はこの回章の核心です。この第4部では、カナの婚宴におけるマリアについて観想的に考察し、私たちのミッション(宣教)を明確にする特質について、それを福音的に根拠づけながら考察します。最後の第5部は、結論として、福音宣教におけるマリアの現存の持つ重要性と必要性について語ります。

## 1. マリアの“僕、奉仕者”（としてのマリアニスト）

宣教についての熱情が、事実、福者シャミナード師の生涯と活動に際立ったしるしであったとはいえ、これは教会全体の中で福者を特徴づけ、区別するものではありませんでした。宣教の熱意は真正なキリスト教的生活に固有なものです。“福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです”<sup>4</sup> と使徒パウロは言っています。キリストの体である教会全体、その肢体である各メンバーは宣教者であり、またそうでなければならぬのです。<sup>5</sup> 宣教師であるシャミナード師をユニークなものとするのは、

---

<sup>4</sup> コリントの信徒への手紙一 9：16.

<sup>5</sup> “父なる神の栄光のために、キリストの王国を全地に広めて、すべての人をあがないによる救いにあずからせ、その人々を通して全世界を実際にキリストへと秩序づけるために、教会が立てられたのである。この目的に向けられた神秘体の活動はすべて使徒職と呼ばれるのであって、教会はこの使徒職を全構成員を通じて、それぞれ異なった方法によって実行する。**事実、キリスト者としての召し出しは、その本性上、使徒職への召し出しである。**”（第二バチカン公会議『使徒職に関する教令』n. 2）

彼のマリア的インスピレーションです。

前回の回章で説明した通り、シャミナード師の中でカリスマ的であるのは、ミッションの観点からの、また、ミッションを目指した、マリアの理解の仕方であり、また、マリアのために生きるその生き方です。その宣教的熱意によって、彼は御子の救いの業へのマリアの参与、つまり、救いの歴史における彼女の役割、という観点からマリアを観想するようにと導びかれたのです。そして逆に、この観想こそがまさに彼にインスピレーションを与え、彼を支えるものだったのです。<sup>6</sup> 使徒活動にあつて、彼は自らをマリアのミッションの僕とみなしていましたし、彼のマリアニスト家族創設の目指すところは、このマリアニスト家族の奉仕をマリアに捧げるといふインスピレーションに応えること以外の何ものでもなかったのです。創設した二つの修道会について聖座からの賞賛の勅令を受けたあと、喜びに満ち溢れて書かれた 1839 年 8 月の大黙想の説教師に宛てた手紙から、力強い幾つかの文章を思い起こすだけで十分でしょう。“したがって、マリアには現代に対する偉大な勝利が保留されています。そして、私たちに迫る信仰の挫折からこの信仰を救う栄誉がマリアに託されています。ところで、私たちは神のこの考えが分かったので、**マリアの命令に従って働き、その足下で戦うため、私たちの微弱な奉仕をいそいそとマリアにささげなければなりません。**”<sup>7</sup>

2001 年の総会は、『生活の規則』を分かりやすく言い換えて、私たちのカリスマの持つこの基本的な要素を見事に要約して示しています：“マリアはシャミナード神父の創立に関する洞察のなかで優先的地位を占めている。マリアとの契約において、シャミナード師は、初代キリスト教共同体の熱烈さをもって福音を生きる‘聖人の民’の形成という使命を始めた。シャミナード師の霊性と福音宣教の熱意の中心に、私たちがイエスに至り着くのはマリアを通してであるという確信が見られる。聖霊の影響のもとに、マリアは私たちをその御子に一致させる。私たちは、マリアの母性的愛をこの地上に永続させるために私たち自身をマリアに

---

<sup>6</sup> コルテス師『総長回章第一号』1.1 参照。

<sup>7</sup> 『マリアに関する記録』第 2 部、74。

奉献するが、それはマリアの子キリストが成長され、すべての創造物の中心となられるためである。このようにして私たちマリアニストは歴史のなかに神の国をもたらすよう貢献する。”<sup>8</sup>

事実、私たちマリアニストは、創立者にならって、時代を通じてマリアのミッションを永続させるために神から召されているのだという意識を抱いています。最初の会憲でシャミナード師が定義しているように、私たちはマリアとの契約による“その取るに足りない僕、奉仕者”なのです。<sup>9</sup> そのような者として、私たちはこの契約を特別な誓願、即ち堅忍の誓願によって確認し、この誓願によって、私たちはマリアのものであるマリア会の中で主に従い<sup>10</sup>、“神の母であり、私たちの母であるマリアへの奉仕に、取り消し得ない仕方で身をささげる”<sup>11</sup> のです。これが私たちの**存在理由**なのです。

このような訳で、“もし‘新しい福音宣教’に効果的に参加しようとするなら、私たちの生活のなかにマリアを再発見し、マリアに相応しい位置を与えなければならない”ということ、2001年の総会は私たちに思い起こさせているのです。総会は続けて言っています：“そのためには、私たちは聖書に基づくマリア的靈性を発展させる必要がある。この靈性は私たちの全生活に浸透しなければならない。なぜなら、シャミナード師は私たちを、個人として、あるいは、共同体として、信仰の生活に招いているが、聖靈の働きに心を開いておられたマリアは、この信仰の生活の模範だからである。私たちが宣教に派遣するのはマリアである。福者シャミナード師に従って、私たちは宣教のために、マリアとの深い関係

---

<sup>8</sup> 『聖靈に派遣されて』5.

<sup>9</sup> 「私たちはこれまですでに述べられたことを繰り返し、確認します。すなわち、私たちの第二の目的の動機、つまり、**人々の救いへの熱意**は、神がその寛大な御心にもとづいて私たちのうちに示してくださったご計画から直接に来るものであって、それは恵みによって私たちがイエス・キリストに似た者となるため、また、マリアのいと小さき僕、奉仕者をめざして私たち自身をマリアに捧げるためなのです」。1839年の会憲、252条。

<sup>10</sup> 『生活の規則』14条参照。

<sup>11</sup> 『生活の規則』15条。



を生き、聖性の道をたどるよう努める。”<sup>12</sup> 前回の総会はこれと同じ流れに沿って、まさに『マリアと共なるミッションにて』と題した文書の中で、“マリアはキリストの最初の弟子であり、その恩寵に満ちた協力は世界にとって決定的なものであった。マリアは‘時のしるし’を読み取ることを私たちに教えてくれる女性である。マリアは教会のかたどりであり、私たち全員にとっての母である。このようなマリアの秘義について倦むことなく考察し、祈るように”と私たちに促しています。<sup>13</sup> 今日の私たちのミッションをより良く識別し、それを生きるために、私たちのマリア的・宣教的な靈性に立ち戻ること、また、私たちはマリアのミッションの奉仕者であるということに立ち戻ること、このことが私たちの大きなチャレンジに他なりません。

この原点への回帰が必要であるあることから、直ちに、マリアニストの靈性と宣教活動の意味と、その独特な特徴に関して、一つの質問が起こってきます。それは次のように表現できるかと思えます： 創立者が私たちの生活をマリアのミッションへの奉仕という見地から定義づけているとすれば、そのことは、私たちの日々の生活と行っている活動を通して具体的に表現されている私たちのミッションにとって、何を意味し、どんな結果をもたらすのでしょうか。

## 2. マリアのミッションは教会のミッション

提示されたこの質問への適切な答えは、先ず何よりも、マリアの母性的ミッションは教会を通して継続されているということです。創立者は次のように言っています：“十字架の下で彼女が生んだキリスト者の母として、また、イエス・キリストが、事実、遺言によってそのような者と定められたキリスト者の母として、マリアは教会を表しています”。<sup>14</sup>

---

<sup>12</sup> 『聖靈に派遣されて』 30.

<sup>13</sup> 『マリアと共なるミッションにて』 8.

<sup>14</sup> 『マリアに関する記録』 第1部、214.

マリアのミッションを理解し、実現することと、教会のミッションを理解し、実現することとは相伴うものです。いずれも受肉の秘義を根源とし、人類を救うために人間の協力を求められた神の玄妙な御計画に応えるものです。この神秘に入り込むことによって、私たちは、マリアのミッションが、また、マリアと共に行われる教会のミッションが、神の救いのご計画の中で必要不可欠であることを発見するのです。それは、神はご自身で私たちを救うことが出来ないということではなく、神が自由意志を持って創造された人類が自らの救いに自由に協力することを、神は望んでおられるからです。かつて私は、脚注なしではありますが、ウィーン大司教、シェーンボルン枢機卿の作とされている次のようなテキストを読んだことがあります、それはこのことをよく表現しています：

“マリアはキリスト教的現実主義を保証する方です。マリアにおいて、神の言葉が語られただけでなく、聞かれたことが、神が語っただけでなく、人間が応えたことが、救いが示されただけでなく、受け入れられたことが明らかとなるのです。キリストは神の言葉であり、マリアは応えです。キリストにおいて神は天から下り、マリアにおいて地は実り豊かなものとなりました。マリアは完全な被造物であることのしるしです； 創造にあたって神が意図されたことはマリアの中に前もって示されています。”

お告げに際して、神は、救い主に人間の身体を与えるために、マリアの“はい”という受諾を求められ、こうして、救いは**人間性の外側から**ではなく**内側から、人間性を伴って**来る、というご自分の計画を明らかにされました。この“はい”を神は全歴史を通して求め続けておられます。そしてまたこの“はい”という応えに、教会はその基礎を置いているのです。そうだとすれば、当然、キリストの救いの業におけるマリアの役割を理解するのに困難を感じる者、あるいは、マリアの役割を矮小化する者、あるいは、これを否定する者は、教会の役割を理解するのに困難を感じるか、矮小化するか、あるいは、否定さえすることになります。そして逆もまた同様なのです。

教会はマリアを常に自らの存在とミッションのあるべき姿 (icon) と見てきました。福音書、特にルカとヨハネにおいて、マリアは“主の母”、“婦人”、“愛する弟子の母”として示されており、マリアがどのように、教会の中に息づいている神秘と、神のご計画の中での教会の役割、とを映し出す鏡であるのかが、明確に示されています。第二バチカン公会議は、聖書と教会の教父たちの深い考察から始まり、現代まで続いてきた長い伝統を要約して、以下のように結論しています：“聖なる処女は、神の母の賜物と役割とによって、あがない主である子と結ばれ、特別の数々の恩恵と務めによって教会とも密接に結ばれている。即ち、すでに聖アンブロジオが教えたように、**神の母は、信仰と愛とキリストとの完全な一致の領域において、教会の象型である。**教会は正当に母とも処女とも呼ばれるが、その教会の秘義の中において、聖なる処女マリアは、処女と母との卓越した独特な範型を示しつつ**第一位を占めた**のである。マリアは信じ従い、しかも男を知らず、聖霊におおわれ、新しいエバとして、古いヘビではなく、神の使者を少しの疑いの曇りのない信仰をもって信じ、父の子自身を地上に産んだ。マリアは子を生み、神はその子を多くの兄弟、すなわち信者たちの中の長子（ローマの信徒への手紙 8：29）とした。マリアはこの兄弟たちを生み育てるために母の愛をもって協力している”。<sup>15</sup>

教会はその存在の深みにおいて、また、そのミッションにおいてマリア的だ。ですから、私たちが、教会における私たちの特別な召命はマリアのミッションにおいて彼女と結ばれた同盟であると言う時、私たちは絶対に、この召命が独占的に私たちのものである、と言おうとするものではありません。私たちの召命とマリアのミッションへの献身を、あたかも私たちだけに与えられた賜物であるかのように、つまり、“他の”ミッションのための“他の”召命と“並んで”教会の中に生じてくる何か特別な召命のように解釈するのは重大な誤りでしょう。教会のミッションは一つです。それは、神の民の存在と活動を通して時代の中で繰り広げられ永続される、御子と聖霊の救いのミッションに他なりません。<sup>16</sup>

---

<sup>15</sup> 第二バチカン公会議、教会憲章 (Lumen gentium)、n. 63.

<sup>16</sup> 従って、神の子は、人々を神性にあずからせるために、真の受肉の道を歩み、

そしてこのミッションはその根源において全くマリア的なのです。<sup>17</sup> 私たちマリアニストの宣教的な召命は、ですから、教会のミッションに奉仕することによってマリアのミッションに奉仕する召命なのです。私たちは自分の召命を、教会の唯一の、ユニークなミッション（それがマリアのミッションでもあるのですが）に付け加えられる一つのミッションとしてではなく、その教会のミッションに協力する一つの独特な方法として見るのです。

### 3. 教会への奉仕に於ける私たちマリアニストのミッション

**会員は、あのイエスの愛弟子のように、  
マリアを神からの貴い恵みとしていただく。  
会員は、イエスの母マリアに対する愛に駆られマリアに身を捧げる。  
それはマリアが母性愛によって聖霊の働きに協力し、  
聖霊が会員をマリアの子イエスの一層完全な姿に  
形造ることができるようにするためである。  
会員はマリアとの契約により、**

---

自分の貧しさによってわれわれを富ませるために、富んだ者でありながらわれわれのために貧しい者となったのである（コリントの信徒への手紙二 8:9）。主によって一度告げられたこと、また主において人類の救いのために行われたことは、エルサレムから始めて（使徒言行録 1:8）、地の果てまで（ルカ 24:27 参照）語り告げ、宣べ広げられなければならない。それは、すべての人の救いのために一度行われたことが、時代の流れとともに、全世界にその成果を生み出すためである。これを完成するために、キリストは、父から聖霊を送った。聖霊は内面から働きかけ、その救いのわざを行い、教会を発展させる。（第二バチカン公会議、『教会の宣教活動に関する教令』（Ad gentes）、nn. 3-4.）

<sup>17</sup> “**教会のすべてのもの**、聖ペトロとその後継者に関わることを含めたすべての事業や役務は、おとめマリアのマントの下に、即ち、神の意思に対する彼女の“はい”という恵に満ちた範囲の中に含まれています。このマリアとのつながりは、私たちすべての人の中にごく自然に強い情緒的な反響を呼び起こしますが、それは、何よりもまず、客観的な価値を有しています。マリアと教会の間には実に**本性的な関係**がありますが、このことは第二バチカン公会議がマリアに関することを『教会憲章』の最後の章、第8章で取り扱うという適切な決定をしたことにおいて、非常に強調されたのです”。（2006年3月25日、聖ペトロ大聖堂広場での新枢機卿たちとの共同司式ミサにおける教皇ベネディクト十六世の説教）

**信仰のうちに多くの人々を長子たるイエスに形造る  
マリアの使命にあずかり、  
マリアを助けるよう努める。**

私たちの霊性とミッションの持つマリア的性格を非常に素晴らしい形で宣言するこの『生活の規則』第6条は、上述した『教会憲章』No. 63を背景としており、また、そこからの文字通りの引用さえ含んでいます。従って、その明瞭ではっきりしたマリア的性格には、暗黙の強い教会的広がりが含まれています。このことは、上記の第6条を私が今説明したことから再読し、“母”、“マリア”という語を“教会”という語に置き換えてみてもその意味が少しも失われないという事実気づく時、明瞭となります。この小さな試みを通して、私たちのマリアへの献身（これは、マリアの協力を得て、聖霊が私たちのうちに御子を形づくってくださることを目指してなされる）と、私たちのマリアとの契約（これは、マリアのミッションへの奉仕を意味する）が、私たちの教会への献身と奉仕によってどのように具体化されるかが、明らかになります。こうして、私たちのカリスマとミッションの持つマリア的性格から直接に導き出されるのは、教会に対する私たちの無条件の愛と献身であるはずですし、マリアニストは、この教会の中に具体化されたマリアの母としての現存と活動を、信仰の眼をもって見るのです。

マリアの僕として、私たちは教会の僕なのです。教会のミッションへのマリアニストの献身は、自らの召命の持つマリア的性格によって育まれます。1839年の会憲第一条の冒頭で、シャミナード師はマリア会を“**聖なるマリアの庇護の下、そのささやかな奉仕を神と教会にささげる小さな本会**”と定義しています。<sup>18</sup>

---

<sup>18</sup> 現在の『生活の規則』もその第1条において、そのマリア的性格との関連はそれほど直接的でも、明確でもありませんが、別の表現ではあるがこの教会への献身を反響させています。“マリア会はギヨーム・ジョゼフ・シャミナードによって創立された聖座法の修道会である。**マリア会は特にマリアに奉献された修道会である。**司祭修道者と信徒修道者とからなる会員は、一つの家庭を形成し、福音的勧告の実践を誓約して神に身をささげ、また**教会の奉仕に献身して、愛徳の完成に尽力する。**”

創立者に倣い、私たちは自分たちを無条件で教会の子と見なします。そのような者として、私たちは、教会の持つ不完全さと人間的限界にもかかわらず、子としての愛と献身、私たちがマリアに捧げるまさにその献身を、教会に捧げるのです。マリアとの契約に由来するミッションは、神の計画への奉仕、つまり、教会への奉仕に私たちが献身することにおいて、具体化されるのです。<sup>19</sup> そのマリア的性格ゆえに、私たちのマリアとの契約は教会のマリア的ミッション内でその特色を帯びており、それ独自の位置を占めています。前回の総会が断言しているように、これまでと同様に今日も、“私たちは、教会のマリア的次元を具体的に目にみえるものとするために、マリアニストのカリスマを広めるよう御主が今もなお私たちを招いておられるのだと確信するものです。”<sup>20</sup> こうして、私たちは教会の本物の“マリア的スタイル”の実現に貢献するのです。

#### “マリア的スタイル”という表現の意味についてのノート

“教会のマリア的次元 Marian-dimension of the Church”、“教会のマリア的スタイル Marian style of the Church”、“マリア的教会 Marian Church”、“教会のマリア的モデル Marian model of the Church”などの表現は、良かれ悪しかれ、“マリア的原理 Marian-principle”（これは基本的には教会がキリストの配偶者であり、また、母であることに基づいている）と、“ペトロ的原理 Petrine-principle”（これは教会の構造に基づいている）とを区別するために使われるようになった表現です。教皇ヨハネ・パウロ二世はこの区別をその回勅『女性の尊厳と使命』の中で用いており<sup>21</sup>、他の機会にも、いつも最も

---

<sup>19</sup> “**会員は教会の肢体として働き、教会の使命に預かる。それ故、教会の生活と教えに心から一致し、力を尽くして、体である教会と共に働く**” [『生活の規則』66条]。“マリア会が教会の宣教にあずかる結果、その会員は、教会生活と司牧計画に統合されている。それゆえ、私たちは司教の指針に従い、かつ本会のカリスマに忠誠を失わず、地域の教会への参加を定期的に検討する” (『生活の規則』5-3条)。

<sup>20</sup> 『マリアと共なるミッションにて』16.

<sup>21</sup> キリストとの絆に参与するすべての信者は“王的祭司職”を与えられますが、

深い意味でこの区別に言及していますが、それはマリアに従って生きるように、また、教会のマリア的な側面を示すことに献身するように、教会を励まそうとの意図があったことだったのです。

この区別を、“教会のマリア的モデル”と“ペトロ的モデル”があたかも対立するかのように、また、教会があたかも二つの別々のモデルを具体化するかのように、対立としての解釈するのは重大な誤りです。教会は一つであり、“ペトロ的”であり、同時に、“マリア的”です。教会は一つです、何故なら教会は何にもまして交わりだからです：使徒パウロが宣言しているように、信仰は一つ、洗礼は一つ、私たち一人ひとりのうちに、また、教会のすべてのメンバーの中に働いておられる霊もただ一つだからです。教会は、同時に、ペトロ的でありマリア的です、何故なら、人間の組織体ではあるが、聖霊によって宿ったからです。

しかしながら、この区別は、この世を旅するキリストの目に見える身体である教会は、その判断基準として、マリアを常に行く手に抱いているという視点を私たちが失わないよう助けてくれます。すなわち、マリアは、教会の歩む小道を照らす星であり、また、その存在が浄化と聖性への絶えざる呼

---

この絆で花婿であるキリストと結ばれている花嫁である教会について話した後で、次のように続けます：“このような理解は、教会を本質的に理解するために重要なことです。教会の一つの次元として、人間によって成り立っている“機構”、歴史を形づくっている部分としての“機構”がありますが、こうした次元においても、教会の本質に関係のない基準で教会を理解したり判断したりすることを避けるべきです。教会は“位階”の組織をもっていますが、この組織は、キリストのメンバーの聖性に完全に従うものです。聖性は“偉大な秘義”に従ってはかれ、その秘義のなかで花嫁は花婿の贈り物に対して愛の贈り物でこたえます。彼女はこれを“聖霊のなか”で行います。なぜなら、“わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです”（ローマ 5：5）。第二バチカン公会議は、伝承の全体の教えを確認しながら、聖性の段階において教会の“かたどり”となるものは、ナザレのマリアであることを思い起こします。マリアは、聖性への道において皆に“先行”するものです。彼女において、“教会は、しみやしわのない完全なものにすでにになっていた”のでした（エフェソ 5：27 参照）。この意味で、教会は“マリア的”な面と“使徒ペトロ的”な両面をもっているといえることができます”（『女性の尊厳と使命』（*Mulieris dignitatem*）27）。

びかけである“最も聖なるもの”、教会を導く助けとなる星なのです。教皇ベネディクト十六世はその最初の枢機卿会議において新枢機卿たちにこの点を想起させて次のように述べています：“兄弟の皆さん、主のお告げの祝日にこの意味深い儀式を執り行うことが出来るとは何という大きな賜物でしょうか！この摂理的な符合は、教会の**ペトロ的原理**を強調する本日の儀式を、もう一つの原理、即ち、**より本来的、基本的なもの**である**マリア的原理**の光に照らして考察する助けとなっています。”<sup>22</sup>

このマリア的原理は、教会のミッションの母性的性格を表現するとともに、次のことも示しています。即ち、“教会はあるタイプの組織を担当する一つの機構、いつまでも続く官僚制度ではありません。教会は、私たちがイエス・キリストの家族であること、そしてそれ故に、私たちはキリストとの愛の共同体に召されていることを意味します。それは、私たちがキリストの母を私たちの母として持っていること、それ故に、私たちがキリストの兄弟姉妹であることを意味します。それは、子供がその母によって育てられるように、私たちもまた、**マリア的な教会 Marian Church**、子羊の花嫁である唯一の教会となるように、彼女によって育てられ、形づくられることを意味します。”<sup>23</sup>

私たちのカリスマの視点から、私たちマリアニストにとって、この教会のマリア的な次元は、他の修道会のカリスマや任務との深い交わりにおいて、特別な形で共鳴するものであって、私たちは、教会のマリア的性格の進展に向けてのマリアニスト独特のささやかな貢献として、自分たちのミッションを理解し、それを生きるのだと確認できるのです。“教会のマリア的スタイルに向けて”は前回の総会の第一文書の

---

<sup>22</sup> 2006年3月25日、聖ペトロ大聖堂広場での新枢機卿たちとの共同司式ミサにおける教皇ベネディクト十六世の説教。

<sup>23</sup> Joseph Kentenich 神父生誕記念日にローマで開催された Schoenstattists 会合でのヨーゼフ・ラッチンガー枢機卿の説教より (Rome, St. Mary Major, Sept. 18, 1985).



タイトルです。この文書は、私たちのミッションがどのように教会のミッション全体と手を取り合って進み、また、それに貢献するものであるかを示そうと試みています。

ですから、私たちのミッションは教会の母性的ミッションの中にその場所を見出します。しかし、それは教会のミッション全体を包含するものではありません。私たちのミッションは、私たちのカリスマの観点そのものからして、教会のミッション全体の持つ一つの見方の進展につつましい貢献をするのです。では、どのようにそうするのでしょうか？ 私たちマリアニストは、教会のマリア的ミッションの持つどんな見方を世界にもたらすべく招かれている、と感じているのでしょうか、そして、どのようにそれをもたらそうとするのでしょうか？

#### 4. 教会のミッションに対するマリアニストミッションの特別な貢献

**すべての宣教活動の目的は信仰の育成である。**

**私たちの行為は直接間接この目的に寄与するためである。**

**そのためにこそ私たちは微力を教会の普遍的使命にささげる。<sup>24</sup>**

事実、これこそ私たちが創立者から受け継いだ教会における私たちのミッションの顕著な特徴なのです。“会員はマリアとの契約により、**信仰のうちに**多くの人々を長子たるイエスに**形造る**マリアの使命にあずかり、マリアを助けるよう努める”と既に引用した『生活の規則』第6条は宣言しています。

しかしながら、もし教会の信仰育成に対するマリアニスト独特の貢献を理解したいと心から望むなら、私たちは（この信仰育成という一般的な目的を）もっと具体化しなければなりません。私たちはどのようにこの（信仰育成という教会の）任務に貢献するのでしょうか？

---

<sup>24</sup> 『生活の規則』5-1条. (a 71 参照)

もし私たちがこの質問を私たちが用いている具体的な手段という視点から理解するならば、私たちは自分たちの行っている事業を列挙することで答えることができるし、或いはもっと一般的には、私たちは多様な任務と活動を通してこのミッションに貢献し<sup>25</sup>、“マリア会はあらゆる福音宣教の手段に向かって開かれている”<sup>26</sup>、と答えることができるでしょう。ただその際、私たちは、教育はいつも“信仰養成の優れた手段”<sup>27</sup>であったし、今後もそうであり続けるということをおぼろげに忘れることはありません。

しかしながら私たちはこの答えでは不十分だと感じます。教会内での私たちのミッションの独自性を明確にするのは、私たちの仕事や事業それ自体ではありません。他の人々もまたこれらの任務に献身しています。質問はこれらの答えよりもっと深いものを求めているのです。それは、心のあり方 (mode)、精神 (spirit) あるいは、スタイルに関わることなのです。結局のところ、答えはマリアにあります。この教会の信仰育成に私たちはどのように貢献するのでしょうか？ — マリアが行ったようにです。教会におけるこの任務に、私たちはどんな貢献をするのでしょうか？ — 私たちが貢献するのは、創立者独特のカリスマ的なマリアへのアプローチの仕方を通して見えてくるもので、福音書がシャミナード師の中に霊示したマリアのスタイルとももの見方 (aspects) です。

特に、福音書の二つのエピソードが“ミッション遂行中”のマリアを示しており、そのことによって、マリアを特徴づける容貌を私たちに見せ

---

<sup>25</sup> 共同体は、種々の職責を通して、その使命を果たす。ある成員は、主として、神の言葉を述べ、また、祈りの分野でキリスト者の共同体を指導する任務を帯びている。ある成員は、主として、教育や文化の領域で働き、人間は、神の計画にこたえることによってのみ、成熟に達し得ることを示そうと努める。また、他の成員は、技術や管理や家事の仕事を通して、社会や共同体に対し、大工の子キリストの絶えざる証しをなす。(『生活の規則』69条)

<sup>26</sup> 『生活の規則』10条 『生活の規則』73条参照。

<sup>27</sup> 『生活の規則』74条、5-10条。シャミナード師は次のように書いています。“「キリスト教教育について」というこのタイトルにはあらゆる手段が含まれていますが、これらの手段を通して、宗教心を人々の精神と心に植付けることができるし、また、その幼少時から老齢にいたるまで、真実のキリスト教生活を熱心にそして忠実に信奉するよう教育することができます。”(1839年の会憲、251条)

てくれます。いずれのエピソードにおいても、マリアの行動は、結果として、それが向けられる人々の中に信仰を覚醒させます。一つのエピソードは聖母のエリザベト訪問で、これはルカ福音書における最初の信仰宣言、すなわち、母マリアを通してイエスを主として承認することを引き起こします。マリアの挨拶を受けたエリザベトは“**わたしの主のお母さま**がわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう”<sup>28</sup>と声を上げるのです。もう一つのエピソードはヨハネ福音書のカナの婚宴で、これは、シャミナード師が私たちのミッションについて語る時いつも引用した箇所であり、また、私たちの伝統の中に絶えず生きつづけているエピソードです。このしるしは弟子たちの信仰を芽生えさせました。“イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、**弟子たちはイエスを信じた**”<sup>29</sup>と福音史家は記しています。

ですから投げかけられた質問に十分に答えるために、私は皆さんにヨハネ福音書（2：1－12）のこのエピソードにもう一度戻って<sup>30</sup>、マリアのミッションという観点から、つまり、私の考えでは福音史家自身の観点からそんなに離れてはいないと思うこの観点から、このエピソードを熟考していただきたいと思います。愛する弟子は、このエピソードにおいて、救いの“時”に当たってイエスから自分に託された使命を果たして行動しているマリアを観想しているのだ、と言えるのではないのでしょうか。

このような理解の仕方はとっぴなものではありません。ヨハネ福音書は、一つの方法として、後ろから前に向かって逆に読んでいくことも出来る福音書です。もしかすると、この読み方のほうがこの福音書の意味をもつ

---

<sup>28</sup> ルカ 1：43.

<sup>29</sup> ヨハネ 2：11.

<sup>30</sup> これはご訪問を放っておこうというわけではありません。シャミナード師はこの秘義の中に恩寵の仲介者、道具であるマリアを観想する多くの材料を見出していました。シャミナード師は幾つかの説教をこのテーマで行いましたが、これらの説教は今でも私たちが彼のマリア的体験に分け入る助けとなっています。（『マリアに関する記録』第1部、414－422, 473－481, 506－512 参照）

と明快に解き明かすのかもしれませんが。基本的に言って、第二章から第十二章にかけて語り行動するイエスは、ナザレトのイエスというよりはむしろ復活したイエスです。彼の奇跡は数も限られ、よく選択されたものであって、その具体性のもつ価値としてよりも、むしろ、イエスの“時”が来て、主の過越しによって開かれた新しい時代の真の“しるし”としてそれらの奇跡がシンボル化しているものとして、提示されているのです。福音史家が明記しているように、これらのしるしの中で“最初の”ものは、カナの婚宴の“しるし”です。カナの婚宴は三日目に起こった出来事であり（2：1）、ひとたび弟子たちのグループが形成されたとすれば（1：35-51）、それは、もう一つの“三日目”、つまり、教会の時、恩寵が満ち溢れる時、神とその民との契約が完成する時に起こることのしるしなのです。

このように考察してみると、カナの婚宴は、ミッション遂行中のあの婦人と母 — マリア（と教会） — を私たちに示すとともに、召命によって私たちマリアニストのものでもあるあの（マリアと教会の）ミッションの特別な性質を私たちに把握させてくれます。

私には、このミッションの性質を明確にする要素が四つあるように思えます：① “先立って”の現存、② 貧しさに対する同情と希望にあふれた配慮、③ 主の言葉に対する信仰の従順を探し求める熱意、④ 共同体の証しです。

#### 4.1 “先立っての現存”

“三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母が**そこにいた**。イエスも、その弟子たちも、婚礼に招かれた”。

この物語の始まり方に私はいつも驚かされます。マリアはイエスとその弟子たちがここで紹介されるのとは違った形で示されています。イエスと弟子たちは招待されたのですが、イエスの母は“そこにいた”のです。

彼女は結婚式の一員として、イエスとその弟子たちに先立ってそこに居ました。イエスが栄光を表わされ、弟子たちが彼を信じた後で、マリアは彼らに加わることとなります。しかし、“しるし”が表わされ、もう何も不足するもののない豊かな祝宴への道が開かれる前に、ぶどう酒が不足して最悪の状態に陥ろうとしていた結婚式のまん中に、マリアは“そこにいた”のです。

私たちがここで単純に文面を追いかけてみますと、この物語はマリアがこの差し迫った問題の部外者ではないことを示しています。彼女は部外者ではなく、この実情を知らされる必要のない人なのです。マリアがそこにいるということは、招待者のようにただ受身的にそこにいるというわけではありません。私たちが目にするのは行動するマリアです。そして、宴会を大失敗から救うのは、祝宴の当事者としてのマリアの行動なのです。今、この出来事を文面上の意味から神学的な意味へと昇華してみますと、福音史家はマリアを不毛なものとなった旧約に属する者として私たちに提示しているといえます。しかし彼女は、今や、新約の最初の信仰者として浮かび上がってくるのです。彼女の信仰の徳、即ち、イエスが誰であるかということについての彼女の承認（イエスは主であるという承認）によって、旧約は新約によって実りあるものとされます。<sup>31</sup> “そこにおられた”マリアのお陰で、彼女の信仰のお陰で、主イエスは行動に移り、悲惨な結果に終わったかもしれないこの祝宴を、恵み豊かなものに変えるのです。

この“先立って”の現存は、マリアを旧約と新約の間、必要なものに欠けている人類とキリストの中に提供される豊かな恩寵との間の境界に位置づけるのですが、また、私たちの世界に現存する教会の特徴でもなければなりません。マリアのように、マリアと共に、世界の中に現存することが必要です。そうすれば、世界は内側から救い主に向かって扉を開くことになるかもしれないし、結果的に信仰の境界線を越える(信仰を理解する)ことになるかもしれません。さらに、世界はこの境界線から遠く

---

<sup>31</sup> この見方はルカ福音書のご訪問の場面と同じです。御主を宿したマリアが姿を現し、挨拶することで預言者と祭司は聖化され、喜びに満たされるのです。

離れて漂流しているので、この“先立って”の現存は更に緊急なものとなっています。世界が漂い離れていくのを前にして、自分自身の中に閉じこもってしまっているようでは、教会は自らのミッションを実現することは出来ません。イエスの母は“そこにいた”のです。ですから、世界が信仰から益々離れていこうとしているところ、そこに私たちが現存することは、私たちのミッションにとって一つのチャレンジなのです。

信仰と世界の乖離がすすむ場所の一つは、あの広大な知識、価値、習慣の集合体としての文化の世界(分野)であって、これらの集合体としての文化は、私たちがその中に組み込まれ、それと折り合ってお互いに作用し合わなければならない現実についての人間的理解を形作っているのです。<sup>32</sup> 既に教皇パウロ六世は“福音と文化の分裂は、特に今日、著しいものがあります。”と力をこめて宣言しています。<sup>33</sup> 教皇ベネディクト十六世は最近次のように述べておられます：“キリストを知らないか、または良く知らないために、彼を救い主として認めることの出来ない新しい世代の人々は、今日、地理的というよりはむしろ文明的な視点から見て、遠く離れているのです。福音を述べ伝えようとする人々に立ちほだかるのは、海や遠距離ではなく、信仰と人間的知識、信仰と近代科学、信仰と正義への取り組みなどの間に立ち塞がるものであって、神と人に

---

<sup>32</sup> “文化”は、広義においては、人間が精神と肉体との多様な能力を鍛錬し、発展させるために用いるあらゆる事からをさす。人間は知識と労働とをもって全世界を支配しようと努力し、家庭とあらゆる市民生活を慣習と制度の進歩によってますます人間らしいものとし、時の流れを通して多くの人、むしろ全人類の発展に役立たせるために、偉大な精神的体験と期待をその作品の中に現し、伝え、保つ。文化とは、これらすべてを意味するものである。そのことから、人間の文化は必然的に歴史的社会的な面をもち、“文化”ということばは、社会学的また民族学的意味をもつことが結論される。この意味において文化の多様性ということが言われるのである。事実、物の使い方、労働のあり方、表現の方法、宗教の実践、慣習の成立、法律と法制度の設定、学問と芸術の発展、美の追求の努力、などが種々異なることから生活様式や価値基準の差異が生じ、こうして、伝統的な慣習からそれぞれの人間共同体に独特の遺産が生じ、また歴史的な特定の環境が作られる。どの国どの時代の人間もこの環境の中に入れられ、また、そこから人間的・市民的文化を発展させるための価値をくみとる。『現代世界憲章』(Gaudium et spes) 53.

<sup>33</sup> 使徒的勧告『福音宣教』(Evangeliū nuntiandi) 20.

ついでに誤った、或いは、表面的な観念から結果的に引き起こされる境界（壁）なのです。ですから、教会は、健全で深い信仰を持ち、深い文化的素養と本当の人間の社会的感受性を具えた人々を緊急に必要としています。信仰と理性の間、福音的精神と正義への渇きや平和への率先した取り組みとの間には深い調和がある、ということを証明し、そのことについて人々の理解を助けるために、教会はまさにこれらの境界で働くことに自分の生涯を捧げる修道者や司祭たちを必要としているのです。こうすることによってだけ、キリストが隠されたまま、或いは、承認されないままになっている数多くの人々に、その真の顔を知らせることが可能となるのです。”<sup>34</sup>

召出しからも伝統からしてもこのような必要性に敏感で、創立の当初から文化が教えられ、伝承される事業に常に携わってきた私たちマリアニストは、この招きが特に自分たちに関連するものと感じます。今回の総会が述べているように、“信仰に向けて世の人々の眼を開くこと”、“信仰と文化との間にある裂け目に橋を架ける”緊急性を私たちは強く感じて

---

<sup>34</sup> 第 35 回イエズス会総会出席者宛の教皇ベネディクト十六世スピーチ：2008 年 2 月 21（木）

上記の言葉に加えて、文化評議会の議長だったプパール枢機卿がマドリードで 2001 年 5 月 28 日、スペイン大学財団に宛てた言葉をここで引用するのも適切でしょう。近代性から受ける挑戦に対する教会の答えについて長官は次のように述べています：“しかしながら、私にとって極まりなく重要と思われる一つの課題をここで指摘したいと思います。私たちが現在苦しんでいる危機は信仰の危機ではなく、文化の危機だと書かれてきました。従って、文化の領域での勇気に満ち、想像力に富んだ確固とした取り組みが必要です。今ここで列挙するにはあまりにも多すぎる理由のために、カトリック信者は文化、芸術、文学創作の分野を放棄し、それらを欠陥のある人間学的な見解やモデルに席を譲ってきたのです。ヨーロッパの教会は、— そしてスペインも例外ではないですが —、これまでこれほど苦しんだことがないほどの‘知的崩壊’を経験し、取って代われる文化的答えを提示できるモデルを持っていない状態にあります。”枢機卿は今日の教会に対し、私の考えでは非常に重要な注意を付け加えています：“教会は、周辺文化に対して閉鎖された敵対的なゲッターの文化とは関係がなく、教父たちがしたように私たちの時代の文化を内側から変革するために断固としてそれを受け止めることと関係があります。これは“カトリック文化のセンター”を創ることではなく、“文化に関するカトリックセンター”を創ることに関わることです。”(Ecclesia [2001] p. 1209)

います。<sup>35</sup>

“マリアを観想し、私たちの創立者の歩みに従いながら、私たちもまた受肉の秘義の観点のもとに現代の世界からの挑戦に答えるべく召されているのだと感じます。即ち：① 世界の真只中で、人々の間にあって、彼らの現実に根ざして行動すること。また、それぞれの社会と文化が、刷新された信仰の育成のために提供してくれる機会を見極めること。② 信仰と文化間の関係に特に深い関心を抱くこと。また、キリスト者としての経験が人間を解放し、社会の正しい発展に寄与するということを確信すること。③ 私たちのミッションにあっては、私たちが生きている社会の社会的、文化的構造をなしている全ての手段、特に全人教育と全人養成に貢献する手段を用いること。”<sup>36</sup>

以上の特徴は常に世界に向かって開かれた特性をマリアニストの使徒活動に与えてきたのであって、この世界に私たちは生活しており、私たちはその一員であって、この世界において、私たちは弾劾ではなくて対話する態度で、組織的な対立ではなく協力する態度で物事に取り組もうとするのです。<sup>37</sup> “会員は人となられたみことばキリストにならい、現代の人々とともに生き、その喜びと希望、悩みと苦しみを共にする。”<sup>38</sup> “共同体は、周囲の人々の中に神からの助けと恵みを見出すことができる。共同体は、喜んで周囲の人々を歓迎し、私たちの信仰、友愛、もてなしを彼らと共にする。このようにして会員は、その生きる時代と場所

---

<sup>35</sup> 『マリアと共なるミッションにて』 16.

<sup>36</sup> 『マリアと共なるミッションにて』 22.

<sup>37</sup> 他方、これは第二バチカン公会議文書の中に秘められた流れとして出ているように、当然、教会のスタイルでなければなりません。“公会議は現代人に対する愛と賛美に満ちていました。さらに、愛と真理の要求にもとづいて、誤りは排斥されましたが、しかし人々自身に対しては、尊敬と愛に基づいた忠告があるだけです。人々を落胆させるような診断の代わりに勇気付ける治療が、不吉な予言の代わりに信頼のメッセージが、公会議から現代世界に向かって出されたのです。公会議は、現代世界のもつ価値に敬意を払うだけでなくこれを賞賛し、その努力を支持し、その熱望を浄化し、祝福したのです。”(教皇パウロ六世、“第二バチカン公会議閉会の演説”より、1965年12月7日 n. 9)

<sup>38</sup> 『生活の規則』 11条.



とに福音の精神を浸透させる。”<sup>39</sup>

以上は『生活の規則』の言葉ですが、これらの言葉によって私たちはマリアの“先立って”の現存を理解し、生きることができるのであって、結果的に、私たちの世界と歴史が抱えている現実の扉が、キリストの働きに向けて開かれるのです。

しかしながら、私たちは、この“そこにいること”、(世の中に) 入ることには、私たちが必ずしも避けては通れないリスク、危険が伴うことを知っています。“世に属することなく” “そこにいる” ためには、難しいバランスが要求されます。この困難に気づいていたシャミナード師は、会憲の中でマリア会の二つの主要目的、即ち“修道的完徳”と“世にあって、人々の救いに尽力すること”を述べ、私たちの生活が如何に活動と観想で養われるかを示した上で、次のように付け加えています：“しかしながら、活動生活の仕事がこれを行なう会員をあまりにも頻繁に世の悪い感化にさらすことから、本会は用心と控え目の規則をその会憲の第三の目的とみなす。この規則は修道者を弛緩から絶えず守ろうとするものである。”<sup>40</sup> 「信仰と文化の関係」の最前線で生きていくためには、信仰を生き生きと保ち、信仰に忠実であるための真剣な取り組みが私たちに要求されます。創立者の懸念に沿って、『生活の規則』は、上述したように、“私たちは私たちの時代の人々と共に生きるよう努める”ことを宣言してから、こう付け加えます：“しかしながら、主の警告に慎んで耳を傾け、世の基準や慣習が、みことばの輝きをくもらせ、あるいはその効力を滅殺することのないよう警戒する。……世に対する警戒心が強ければ強いほど宣教活動においてますます大胆になることができる。”<sup>41</sup> マリアの信仰のような深い、一貫した信仰なしには私たちの“そこにいる”ことは意味あるものとはならないでしょう。それはキリストを指し

---

<sup>39</sup> 『生活の規則』43条.

<sup>40</sup> 1839年の会憲、序章、3条.

<sup>41</sup> 『生活の規則』11条. 『生活の規則』のこの箇所について述べているホセ・マリア・サラベリ神父の回章第八：『受肉と警戒』（1984年12月8日）をここで念頭におくことは適切なことと思われま

示すことも、彼に先立つこともない、薄められた現存となってしまおうでしょう。 そのようなあり方は、最早、“先行的”なものではありえないのです。

#### 4. 2 貧しさに対する同情に溢れ、希望に満ちた配慮

“ぶどう酒が足りなくなかったので、イエスの母は彼に言った： ぶどう酒がなくなりました。”

マリアの現存は、信じる者にふさわしく、全てに目を届かせ、配慮に満ちています。彼女の信仰は彼女を取り巻く新しい現実に光を当て、ユニークな気づきを彼女の視線に与えます。それは彼女を千里眼の人にします。こうして、彼女は本当に欠けているものが何か、結婚式を立派な婚宴で閉じるのを妨げているのが何なのか、つまるところ、神の国がその完全な栄光のうちに現れるのを妨げているものは何なのかを見てとるのです。

同時に、彼女の現存は“同情に満ちており com-passionate”、言い換えれば、“共に - 苦しむ suffering-with”という連帯性を生きています。必要なものが欠けている状況は、彼女自身の欠乏体験を思い起こさせます。彼女もまた必要なものに不足しており、貧しいのです。しかしながら彼女は同情に満ちていると同時に、また“希望に満ちて”おり、希望へと開かれています。何故なら、彼女は、信仰によって御主の手に自らを委ねた時、御主がどのように貧しさを豊かさに変えてくださるかを自分の身体で経験したからです。ですから、彼女はイエスに向かって言います：“ぶどう酒がなくなりました。”

至るところで必要なものの欠如が、それが社会的なものであれ、教会的なものであれ、あるいは、修道会に関わるものであれ、ますます目につくようになった今の時代に、前回の総会はこの視点からマリアを観想するよう私たちに呼びかけています。“個人として、マリアはその処女性に

おけるこころの貧しさを深く感じていました。神の前に無一物である自分を感じていたのです。マリアはまだ、通常人々が女性としての彼女に期待するようには、母となっていないませんでした。ですから、マリアが‘主は身分の低いこのはしのために御目をとめてくださいました’と歌っても全く当然のことだったのです。また、マリアはその処女性を傷つけることはありませんでしたが、‘神に不可能なことはない’と信じる事が出来たのです。‘新しいこと’を行うため、つまり、新しい人間を造り出すために、神が求めていたのはまさにこのような貧しさと開かれたころでした。神の目はマリアに向けられ、まさにご自分が必要とされるもの、実りある処女性をそこに見出されたのです。神はこうして祖先たちになされた契約を成就されたのですが、しかしながらそれはイスラエルがそれまで決して知る事のなかった方法でなされたのです。神はご自分の神的生命でマリアの心の貧しさを満たされました。・・・現実が私たちを落胆させる時、マリアに倣って、私たちの貧しさを神に捧げ、私たちの中に‘新しいこと’をなさってくださいよう祈りましょう。”<sup>42</sup> この体験から、あのマグニフィカトの歌が生まれます。

“現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事がらで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない。”<sup>43</sup> 『現代世界憲章』の冒頭を飾るこの言葉は、私たちがただ今考察したマリアの態度と教会との一体化を表現しています。マリアと一体化した教会は、欠如しているもの、苦しんでいる人々に向けられるあのマリアに特有の感性をもって世界に存在することによって、世界の中での自らの使命が生ずることを理解するのです。

私たちの世界の“祝宴”に、必要なものが欠如しているのは明らかであり、それらは無数にあります。この世界への神の子の到来によってもたらされる神の国の全てのしるし、つまり、平和、正義、兄弟愛、赦し、

---

<sup>42</sup> 『マリアと共なるミッションにて』 9-10.

<sup>43</sup> 『現代世界憲章』 (Gaudium et spes) 1.

和解、連帯、すべての人の生命と尊厳への尊敬、・・・一言で言えば、御父から来る愛、を私たち人類が必要としていることを理解するには詳しく分析するまでもないでしょう。この世界に現存している教会は、これらの不足しているものに気づいており、またそうでなければならないのです。マリアがそうであったように、教会はこれらの不足に関心を持たざるを得ないのです。教会は人類のために神の国に奉仕しているのですから、人類に深い関心を抱くのです。

第二バチカン公会議は、その全体が、世界の真ただ中で教会が持つこのマリア的な現存、つまり、人間に関わるもの全てについて注意深くあること、人間が必要とするものについて敏感であること、を实践するものでした。公会議終結に当たって、教皇パウロ六世は以下のように宣言しています：“おそらく教会は、この公会議の間ほど、自分の周囲の社会に近づき、これを知り、正しく理解し、その中に浸透し、これに奉仕し、福音を宣べ伝え、そして、絶えず急激に変化していく社会の中でそれを把握し、そのような社会に言わば追いつかなければならないと感じたことはなかったのです。このような姿勢は、最近の数世紀、特に19世紀と20世紀に、私たちが見てきた教会と世俗社会との間の隔たりと断絶に対する教会からの応答であって、このような姿勢は、**教会の本質的な救いの使命から常に霊示を受けて、**公会議中、止むことなく力強く、影響を及ぼし続けました。それである人々は、教会をとりまく世界や、過ぎ去る事柄、文化的な流行、その時代の必要性、馴じみのない考え方などへの安易で行き過ぎた反応は、公会議が伝統に対して払うべき忠実さを犠牲にし、このことがひいては公会議固有の意義と目的を損なって、このエキュメニカルな教会会議の参加者や決議に影響を及ぼすのではないかと疑うほどでした。・・・私たちは、むしろ、愛がどれほどこの公会議の主要で信仰的な特徴であったかを指摘したいと思います。私たちが互いに愛し合うことによってキリストの弟子であることをすべての人が認めるであろう（ヨハネ 13：35）と主自身が教えておられるのですから、このような公会議の方針を、宗教心に欠けていたとか、福音に忠実でなかったと、誰も非難することはできません・・・。” そのあと教皇は付け加えておられます：“善いサマリア人の昔の話がこの公会議の

精神的原則でした。すなわち、人々に対する限界のない共感が公会議全体に浸透していました。この公会議は人類が増加するにつれて大きくなる人々の必要を、全力を傾けて考察しました。”そして無神論的なヒューマニズムとの対決に言及してこう結論します：“私たちは、現代のヒューマニストと自称し、最高のリアリティーである超自然的価値を認めない人々に、少なくともこの公会議の持つ一つの良い性質を認めてくれるよう、また、私たち自身の新しいタイプのヒューマニズムを知ってくれるよう訴えます。事実、**私たちもまた、誰よりも人間を礼賛する者なのです。**”<sup>44</sup>

公会議の精神の中に力強く示されたこの全くマリア的な教会の感受性は、私たちの現在の『生活の規則』の中に反映されていますが、この『生活の規則』は、さまざまな欠如に苦しむ私たちの社会と世界のまん中に神の国を建設するための関心と取り組みを、正義、平和、和解を通じて、私たちの宣教的な伝統の中に取り入れています。これらの関心と取り組みは、教皇パウロ六世の語る“共感”をもって“感応し”、私たちのようにこの分野で働いている全ての人たちと力を合わせるように、私たちを導くものなのです。

**この目標を達成するため、会員は、  
直接、福音宣布に従事するが、  
同時に、救いの教えに調和する社会の変革や  
文化の向上のためにも働く。  
信仰は、会員および会員が養成する宣教者を、  
真の回心へ導き、  
また、正義と自由および人間の尊厳のために  
戦っている人々との連帯に向かわせる。  
信仰は、人々および団体の和解といやしを通して、  
平和のために働くよう、常に、私たちを駆りたてる。**<sup>45</sup>

---

<sup>44</sup> パウロ六世、“第二バチカン公会議閉会の演説” 1965年12月7日、nn. 6-8.

<sup>45</sup> 『生活の規則』72条.

『生活の規則』第一巻のこの条文は、第二巻の 5-16 条から 5-20 条において敷衍されています。ここではスペースの関係でこれらの条文を引用はいたしません、今日の私たちのミッションに関する基本的要素の全体像を把握するため、是非、再読してくださるようお勧めいたします。

マリア的であるためには、世界の欠如しているものに向けられた私たちの積極的な配慮は連帯的でなければなりません。幸いにも、教会や世界のなかには、決して十分とは云えないまでも、多くの人々がこれらの欠如を感じ取って、これらを克服しようとして活動しています。とはいえ、実際に連帯した活動によってそれをする人は僅かです。私たちの世界が多く欠如に苦しんでいることを感じ取っている人は多いのですが、彼らは“この欠如している現実の外側”に留まっていて、その内側に入り込んで取り組んでいる人は僅かです。外側からやって来て“父親”として行動する気になる人は沢山いますが、内側から“兄弟”として行動する人は僅かです。しかし、私たちは貧しい人たち、苦しんでいる人たちと連帯してこの世に身を置くように召されています。これは、清貧の誓願が直接に私たちに求めることなのです。この誓願により“会員は、人々の苦悩と貧困に対する感受性を深め、貧者への特別な愛をはぐくみ、その資力を彼らと分かち、その才能をささげて彼らと共に働く。このようにして、会員は、正義と愛に満ちた社会の建設に尽力する。”<sup>46</sup>

この配慮はまた、希望に満ちたもの、今日の世界が特別に必要としている真実の希望に満ちたものでなければなりません。欠如に直面して、これを非難する人は多いのですが、この現実を世の人々に知らせる人は少ないのです。偽りの希望を助長する人は多いのですが、本当の希望の道を示す人は少ないのです。現代人は“私たちの抱いている希望について説明するよう”求めます。<sup>47</sup> 現代人は、私たちがマリアのように、“自分の低いはしのためにおん目をとめ”、“彼女に偉大なことをなす”ことができる愛に満ち溢れた神についての深い個人的な体験を、私たちの存在

---

<sup>46</sup> 『生活の規則』 27 条.

<sup>47</sup> ペトロの手紙一 3 : 15.

をもって示すよう求めているのです。このような神の体験とは、マリア自身の個人的な喜びを目指した彼女個人のものとしてではなく、身分の低い者、貧しい者、渴いている者にとって、人間的な必要に応える良い知らせとしてマリアが生きたような、そのような私たちによって生きられた“希望の神の体験”のことであります。隣れみに忠実である神とのこのような個人的な体験なしには、私たちの活動は、それがどんなに連帯に基づいたものであるにせよ、最終的には不毛なものとなってしまいます。この神との体験から、私たちは、マリアと共に、— “ぶどう酒がありません” — と単に貧しさに気づいて言うだけではなく、貧しさのただ中であって、希望への小道を開くことが出来るのです。

### 正義と平和への私たちの積極的な取り組みに関する覚書

これまで見てきたように、私たちの『生活の規則』は私たちの宣教活動におけるこの点の重要性を強調しています。第二バチカン公会議以降、教会は自分の役割として、修道生活の特徴づけてきたあの貧者に対する特別な感受性と清貧の誓願そのものに訴えて、この件について特別な形で修道生活への呼びかけを行ってきました。<sup>48</sup> しかしながら、教会の歴史を通じて貧者や苦しんでいる人々への配慮が修道会のカリスマの中に一貫していたとしても、— そしてこの点に関して私たちも例外ではありませんが<sup>49</sup> —、この困難で具体的任務は未だ本来あるべき姿で私たちのミッションに統合されていません。“この

---

<sup>48</sup> 例えば、『奉献生活』(Vita consecrata)、nn. 82, 102 参照。

<sup>49</sup> この点に関しては、私たちの創立者の生涯、すなわち、その当時の“ストリートチルドレン”である煙突掃除の子どもたちや社会の片隅に追いやられた売春婦、あるいは見捨てられた人々への彼の世話、“最も貧しく、一番若い子供たち”[1839年の会憲 253 条]、別言すれば最大の必要を抱えている人たちを優先すること、つまり、創立者の時代の周辺に追いやられた社会で最も必要とされた初等教育を優先させた彼の選択を思い出すだけで十分でしょう。同じ考えに則って、『生活の規則』は“本会のすべての使徒活動は、・・・恵まれない人々の救済に向けられる。”(2-11 条)、また、“新しい使徒活動を考えるに際しては、貧者に直接関係する事業及び、貧者の生活をもっとも潤す事業に一定の優先権を与えるように努める。”(2-17 条) という条文を私たちに思い起こさせます。

任務は、後になって追加されたカリスマであり、最近の流行である”とか、“マリアニストの宣教的な伝統には属さない”とかいう口実を用いて、それを試みようとする人々や共同体があります。これは関心がないからでしょうか？あるいは感受性が欠けているからでしょうか？私はそうは思いません。この点に関する養成が欠けていたからでしょうか？ そうかもしれません。

第二バチカン公会議から来るこれらの宣教面での強調点が、私たちの会則の歴史において新しいものであることは確かです。それで、これらの点を取り入れ、自分のものとするためには、私たちが恐らく慣れてはいない新しいやりかたで、自らを世界に開かねばなりません。従って、私たちは知的な養成だけではなく、霊的、司牧的な養成をも必要としているのです。またこれと一緒に、この取り組みを具体化し、伝統をつくりあげることにつながる具体的な行動も必要になります。最近の数回の総会は、『生活の規則』の呼びかけに応じて、繰り返しこの点を私たちに想起させてきました。私たちは一人ひとりこの困難な任務に取り組まなければならないし、また、お互いに助け合わなければならないと。

#### 4.3 主の言葉に対する信仰の従順を求める熱意

“マリアは給仕たちに言った：‘この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください’。”

マリアは、この言葉をもって、欠如を真の希望へ、ぶどう酒の不足を良いぶどう酒を味わう可能性へと道を開きます。更に重要なことは、キリストが主として、救い主として、真の希望である唯一の方として認められるように、マリアはキリストの栄光が表れるのを可能にするということです。

マリアの言葉は、彼女が信仰者としてイエスを主として暗黙裡に認めて



いることを推測させ、それを示しているとは言え、その言葉はこの承認を明示してもいないし、キリストが主であることを明快に説明し始めてもいない、ということに気づくのは興味深いことです。マリアの言葉は、単純、率直にイエスの言葉に従うように、との招きなのです。

ここでもまた私たちは、マリアのこの行動が彼女自身の個人的経験から来るものであると理解できます。彼女が“給仕たち”に声をかけるのは、多分“主のはしため”という彼女の身分を彼らのうちに認めているからなのです。マリアは給仕たちに指示を出しますが、その指示の中に、“お言葉どおり、この身に成りますように”という彼女の言葉のこだまを見出すのは難しいことではありませんし、この言葉を通して、神は彼女の人生と存在に入られ、子を生むことのない彼女の人間的処女性を神的母性に変容させられたのです。マリアは、神の言葉への従順なくしては神の現われはないこと、すなわち、信仰の従順は人が信仰の承認というめぐみに到達することが出来るための前提条件<sup>50</sup>であることを、自分自身の体験から知っています。別の言い方をすれば、“マグニフィカト”の体験をするためには、お告げにおける“はい”を通らなければならないということです。ですから、マリアは“給仕たち”に“この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください”と言ったのです。

人間の必要を満たし、人間をその欠乏から救う力は私たちにはありません。

---

<sup>50</sup> “信仰の従順”（従順へと導く信仰）と、“信仰の承認”（＝イエスを主として認めさせる信仰）とのこの区別は、福音書のイエスの奇蹟物語に基づくものですが、特にヨハネ福音書において明らかであり、この両者の間には時間的な間があります。例えば、役人の息子のいやしのケース（4：46－54）、ベトザタの池での中風患者のいやしの物語（5：1－15）、あるいは、生まれつきの盲目のいやしの物語（9：1－38）を考えてみてください；これらの奇蹟は、信仰への通路に関するしるしであることが、全ての奇蹟物語の中でもっとも明らかなものです。キリストへの決定的な信仰告白は“彼の栄光があらわされた”後になされ、そしてこのキリストの栄光は、“あなたの家に戻れ”、“床をとって歩け”、“シロエの池に行って洗え”というキリストとその言葉への信仰と従順の行為に続いてあらわされるのです。この“時間的な間”の中に信仰養成の要理教育の小道は組み込まれていて、キリストへの回心から始まって、キリストが遂行する贖いの秘義の受け止め、参与へと進んでいくのです。（参照：『教会の宣教活動に関する教令』（Ad gentes）nn. 13－14）

私たちと同様に貧しく、限界のあるマリアにもありません。しかし、マリアと一緒にあれば、誰がこの力を持っておられるのかを私たちは確かに知るのであり、その方が私たちに求められる唯一のことは、盲目的で無条件である純粋な信頼の行為を持って、私たちの限界と貧しさをその方の言葉に委ねることなのです。そのような信頼は、私たち自身の中にあるあらゆる理由を超えた唯一の理由としてのその方だけに見出されるものです。皆がぶどう酒を待ちわびている時に、**彼の言葉に従って**水がめを水で、しかもかめの縁まで満たすこと、一晩中働いたのにただの一匹の魚さえ獲れなかった時に、ただ**彼がそうするように言ったので**網を投げ入れること、自分だけで食べてもかまわないひと切れのパンと数匹の魚を、**彼が求めているので**五千人の人々に食べさせるためにさし出すこと、すでに死臭が漂っているにもかかわらず、**彼の指示に従って**墓石をとり除けること、・・・信仰の従順によってこのように行動すること、そしてこのように行動することだけが、私たちの現実の世界に対して主の救いの力を示し続けることになるのです。“イエスはその栄光をこのように現され、それで、弟子たちは彼を信じた。”

カナにおけるマリアの介入を観想すれば、マリアのミッションが、私たちを導き、キリストへと連れて行くことであるのが分かります。私たちがすでに見たように、マリアは“イエスは主である”とはっきりと証言して介入するのではなく、イエスの言葉に対する信仰の従順を喚起することによって介入します。それは、現実の出来事を通してイエスがはっきりと示されるようになり、私たちがあの真実の証しをするようになるためです。その業を通して、イエスはご自分と御父を現し、証言しておられるのです。イエスの言葉に耳を傾けず、従おうとしない者は誰もイエスを知る術を持つことが出来ません。何故なら、その人は、イエスが自分は本当は誰であるかを示そうとしてご自分を現すことを、許さないからです。<sup>51</sup> “宴会の世話役はこのぶどう酒が何処から来たのか**知らなかったが**、‘給仕たち’は**もちろん知っていた**”。

---

<sup>51</sup> 私たちが知っている通り、これはヨハネ福音書で繰り返されるテーマです。信仰への道はあかしを受け入れるということを体験するものなのです。4:39-42、5:31-45、10:27-39、12:37-50 参照。

私たちマリアニストにとって、このカナの婚宴の物語は非常に特別な意味を持っています。これはまた、全教会にとっても非常に意味深いもので、教会は、マリアにおいて自分自身を観想することによって、世界をキリストへと導いていく自分の使命をこの物語の中に認めるのであり、このキリストの中に、人類は真の救いを見出すのです。<sup>52</sup> とはいえ、私たちにとってこの物語が有する特別な意味は、このマリアの仲介の行為から、シャミナード師が私たちの**存在理由**と私たちの使命を引き出したという点です。

シャミナード師は、マリアの宣教的な行動について観想するとき、その焦点をマリアが“この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください”と言ったまさにその瞬間に置いていました。師はこれを福音書におけるマリアの“**まさに使徒活動の時**”だと考えたのです。師はこの瞬間に強く惹きつけられたので、これは私たちのモットーを生み出すことになったのです。“さて、私たちは全ての人の最後の者に過ぎませんが、現代の大きな異端に対するマリアの戦いにあって、全力を尽くして彼女を助けるべく彼女に召された信じ、マリアがカナの婚宴で給仕たちに言った‘**この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください**’という言葉<sup>53</sup>を私たちのモットーとするのです。・・・私たちのなすべき働きはとてつもなく大きいものです、でもそれは素晴らしいものです。もしこの仕事が普遍的なもの（何処までも広がるべきもの）であるとすれば、それは私たちが‘**この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください**’と呼びかけるマリアの宣教師だからです。そうです、私たちは一人

---

<sup>52</sup> “教皇としての方針を述べた最初の回勅で、私は‘あらゆる時代、とりわけ現代の教会の根本的な使命は、人間の精神をキリストの秘義に導き、人類全体の意識と経験をキリストの秘義の方向に向ける’ことだと言いました。”（教皇ヨハネ・パウロ二世、『救い主の使命』n. 4）“福音宣教はまた、その基礎、その中心、その活動力の頂点として、神の子イエズスについての宣言を常にもっています。それは、人となり、死し、そしてよみがえられたキリストにおいて、神の恵みと憐れみの贈りものとして、すべての人々に救いが与えられたという明らかな宣言があります。その救いは、現世の物質的、精神的な必要や一時的な願望を必ずしもみたすものではなく、すべての限界を超えて、唯一にして至聖な絶対者なる神との一致に達する救いであります。この世で始まるが、永遠において完了される超越的、終末的な救いであります。”（教皇パウロ六世、『福音宣教』n. 27）

ひとりマリアの宣教師なのです。聖母は私たち一人ひとりに、世にある私たちの兄弟の救いのために働くよう、任務を託しているのです。”<sup>53</sup> それで、確かに、創立者の考えの中では、マリア会はまさにマリアの指示への応えとして、彼女の指揮下にある本物の“僕”の一団として、世界と教会の中に存在しているのです。結果的に、マリア会は、主の言葉に対して無条件にささげる信仰の従順の精神で強力に武装し、主の言葉を世に知らせるといふ使命に完全に奉献された一団でなければなりません。

1827年の各黙想会の終結にあたって、シャミナード師は修道者たちに述べています：“この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。この言葉はマリアとその子イエスが招待されていたガリラアのカナの婚宴で彼女が給仕たちに呼びかけた言葉です。つまり、‘彼があなた方に行くよう願うことは何であれそれを行いなさい、たとえそれが理屈に合わないように見えても、理屈で解決しようとしてはなりません’と。これはあたかも彼女が‘彼を信じなさい’と言っているかのようです。そうです、これらの言葉はまた、聖母マリアが子供である私たちに、‘私の子イエスがあなた方に言うことは何であれそれを行いなさい’と呼びかけている言葉でもあります。でも、どのようにイエスが言われることを聞き取るのでしょうか。信仰をもって、とマリアは私たちに言うのです。信仰をもってこれを聞きましょう。信仰に依り頼み、その教えを実行に移しましょう。このようにして、私たちはイエス・キリストが私たちに言うことを実行するのです。マリア会の精神は信仰の精神です：私たちは信仰によって神へと向かわねばなりません。**‘世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です’**（ヨハネの手紙一 5:4）。マリア会の目的は：1) 各修道者の完成、2) 隣人の救い、3) 神の栄光を求める熱誠です。これらの目的達成のために用いられる手段は信仰です。”<sup>54</sup>

このような信仰に活気づけられて、私たちは人々の中にこのような信仰を呼び起こすマリアの使命に協力するのです。シャミナード師が使徒活動の狙いとしたのは、当時の社会に広がっていた無信仰でした。この無

---

<sup>53</sup> 『マリアに関する記録』第2部、81－82。

<sup>54</sup> 『マリアに関する記録』第2部、833－834。

信仰は神の国が現われるための道を閉ざしていたのです。“私たちの時代を支配している大きな異端は宗教的無関心であり、これはエゴイズムによる無気力と道徳的退廃の状態へと人々の魂を麻痺させ、弱めています。・・・神聖な信仰の松明はその明るさを失い、キリスト教世界で消えかかっています。・・・私たちが、予言されてきたこと、つまり、全般的離教とほとんど普遍的な背教、を目撃することになる時代がきたように思われます”。<sup>55</sup> 世界についてのシャミナード師の見解を示すこのような言葉を読むと、このような世界の現実に対して師の使徒的応答を引き起こしたのは、主についての知識の不足というよりも、その不足の原因となったもの、つまり、信仰の欠如であることが分かります。それゆえに、シャミナード師はカナでのマリアの行動の中に、自分が実行するよう召されていると感じたことの完全なイメージを見出すのです。即ち、信仰を広め、育成すること、人類を信仰へ連れ戻すこと、主への信仰の従順によって“失敗に終わろうとする婚宴”を良いものに変える男女のキリスト教徒を増加させること、などです。“エゴイズムによる無気力と道徳的退廃”を神の国の祝宴に変えることは可能なのです。ですから当然の帰結として、すでに述べたように、マリアニストのミッションは完全に信仰の養成へと向けられることになるのです。

#### 4. 4 共同体のあかし

“この後、イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下って行き、そこに滞在されたが、長い日数ではなかった”。

この“婚宴”の最初の結果、つまり、最初のしるしは、普遍的で人々を一致させる共同体の誕生であり、そのような新しい兄弟関係のこの世界への出現です。人々を一致させるというのは、キリストが、洗者ヨハネの証言<sup>56</sup> で始まったあの一週間の最後の日であるこの“三日目”に先

---

<sup>55</sup> “黙想指導者宛の手紙”（『マリアに関する記録』第2部、73）

<sup>56</sup> ヨハネ 1:19-28. この証言の後で、福音史家は“その翌日”次々と起こったイエスと弟子たちとの出会いに続いた共同体の形成を叙述しています。ヨハネの

立って彼の周りに形成されていた“新しい家族”、すなわち、彼の弟子たちを伴って、古い婚宴にやって来たからです。イエスは、この新しい家族を、自分の母、兄弟たちという“古い家族”と一つにして、新しい婚宴から出発して行きます。この新しい共同体は、一つに結ばれることと共に、地理的には全世界に広がるものです。論理的に言えば、それはカファルナウムという一つの場所に物理的に存在しているのですが、でもこの土地に閉じこめられてはいません。“そこに滞在されたが、長い日数ではなかった。”

カナの婚宴の物語のこの最後の一行は、明らかに、ルカが使徒言行録の中で描くエルザレムの最初のキリスト者の共同体<sup>57</sup>と関連しています。イエスの母と兄弟たちはこの最初の共同体と一つになっていて、そこに主はご自分に回心する人たちを“加え”続けているのです<sup>58</sup>。この新しい共同体は世界に“新しい祝宴”を証ししており、この新しい祝宴においては、一人として持ち物を自分のものとは考えないので、必要なものに事欠く人は誰もいません。それは、すべての物を皆が共有し、そこでは交わりが支配しているからです。“彼らは心も思いも一つにしていた”。<sup>59</sup>

共同体は、福音と不可分な現実であり、福音が宣べ伝えられるところで

---

証言の日からカナの婚宴までは七日間、一週間です。

<sup>57</sup> ヨハネ福音書がこの救いの“最初のしるし”を、最初のキリスト教共同体と同様に、エルサレムではなく、ガリラアで起こった出来事としていることは、一方では、キリストを通じて神から提示された救いを拒否したユダヤ人社会とのヨハネ福音書に特有な論争を、他方では、ヨハネ福音書を生んだ教会共同体の“一風変わった”性格を示すもう一つのはっきりした証明です。この“一風変わった”性格は、ペトロより“愛する弟子”を優位に立たせることによって一番よく見えてくるのですが、それでも、“一つの群れ、一人の羊飼い”（ヨハネによる福音書 10：16）とあるように、深い交わりの中で生きています。イエスの司祭としての祈りは、キリスト者にとって交わりがどんなに大切で不可欠なものであるか、を示しています（ヨハネによる福音書 17：1-26）。ヨハネ福音書が、そのエピローグにおいて、群れの牧者としてのペトロの使命を認めていることは、事実上、このこと（交わりの大切さ）を表明しています。

<sup>58</sup> 使徒言行録 2：47.

<sup>59</sup> 使徒言行録 4：32-35. 2：42-47 参照.

は、何処にあっても本質的な要素です。キリスト教生活を養い育て、成長させるために必要な場としてだけではなく、また、何にもまして、それを証しするためにも必要です。この新しい兄弟関係の中で、主の言葉と主のダイナミックな現存の持つ変容させる力が現われてきます。カナの婚宴についての上述のコメントに準拠すれば、本物のキリスト教的共同体においては、主が世界に対してご自分自身の証人である、と言えるでしょう。<sup>60</sup>

教皇パウロ六世はその使徒的勧告『福音宣教』の中で次のように述べています：“最初に次の点を指摘することは相応しいことです：教会にとって、福音宣教の第一の方法は、キリスト教徒としての真正な生活のあかしです。**何ものによっても遮られてはならない交わりのうちに神に献げられ、同時に、隣人への奉仕**に限りない熱意を示すキリスト教徒の生活のあかしこそ、まず強調されるべきものであります。最近、私たちがある信徒グループに話したように、‘現代人は、教師の言うことよりも、あかしをする人の言葉を喜んで聞きます。教師の言うことを聞くときは、教師があかしをする人だからです。’・・・教会が世の中を福音化するのは、行為と生活によるのであって、換言すれば、イエズス・キリストにたいする教会の忠実さの生けるあかし、ならびに教会の清貧と解脱、この世の権力に屈しない自由の生けるあかし、一言でいえば、聖性のあかしによるのであります。”<sup>61</sup>

---

<sup>60</sup> “私の名のもとに、二人あるいは三人集まる所には、わたしもその中にいる”と主は仰せられた。私たちのうちにおられるキリストが、共同体の生活に靈感と力を与え、この生活を周囲の人々へのしるしとされる。“あなたたちが互いに愛し合うならば、それによって人は皆、あなたたちがわたしの弟子であることを認めるであろう。”（『生活の規則』37条）

<sup>61</sup> 『福音宣教』n. 41. 教皇ヨハネ・パウロ二世はこの断言を受け継いで、次のように書いています：“キリスト者の生活のあかしが、宣教の第一のかけがえのない方法です。・・・あかしの第一の方法は、新しい生き方を示す宣教者の生活、キリスト教的な家族の生活、そして教会共同体の生活そのものです。人間としてのいろいろな限界と欠点をもちながらも、キリストを模範として質素な生活を営む宣教者は、神と超自然的な真実のひとつのしるしです。しかし、神である主にならおうと励んでいる教会内のすべての人は、このようなあかしをすることができますし、またしなければなりません。多くの場合、それが宣教者であるための唯

シャミナード師がこの真実をどれほど深く確信していたかは良く知られた事実です。師が繰り返し述べていたように、もし私たちがあの最初の共同体のあかし、“聖なる民の壯観”、を示さなければ、世界が福音に回心することはありえないのです。<sup>62</sup> この確信から、ボルドーのコングレガシオンから始まって修道会に至るまでの、師の全ての創設にシャミナード師が与えた強い共同体的性格が現われてきました。師の宣教的な働きにおいては、福音を宣布することと“集めること”、回心させることと“加入させること”とはいっしょになって進むのです。“シャミナード師は、神の霊に促され、キリスト者の共同体は、宗教事業(使徒的奉仕)において、いかほど豊かな結果をもたらすことが出来るかよく理解した。このような共同体は、今日もなお福音を、精神と文字に従って全面的に生き得ることを示す、聖なる民のあかしをすることができるはずである。キリスト者の共同体は、当然魅力的でなければならない。それでこそ、新たな宣教者を生まれさせ、この宣教者がまた新たな共同体を作らるう。このような共同体は、社会を再びキリスト教化するために、絶好な手段となる。福者シャミナード師がコングレガシオンの名で創立した男女の最初の団体は、このような集団から起こったのである。”<sup>63</sup>

私たちの創立者の精神を吹き込まれた『生活の規則』は、私たちの生活に於ける共同体の中心的位置を、私たちの生活が展開される場（すなわち、私たちが生きている生活の共同体、信仰の共同体、宣教の共同体）

---

一の可能な道なのです。福音のあかしとして世界にもっとも強く訴えるのは、人々にたいする配慮であり、貧しい者、弱い者、そして苦しんでいる人々に対する愛です。この姿勢とその活動の基礎となっている完全な寛大さは、人間の利己主義に強く反対しています。それが神と福音とに導く正しい問いかけを呼び起こすのです。”（『救い主の使命』n. 42）

<sup>62</sup> ロレット修道女会並びに貧しき司祭会の創立者ピエール・ビアンヴニュ・ノアイユ師が、私たちの創立者の会との融合の可能性について相談してきた折に、シャミナード師が同師に書いた 1826 年 2 月 15 日付の手紙：“本会の本分は人々に聖なる民の姿を示し、そのことによって初代教会のように、今日でも、福音がその精神のうえでも文字のうえでも、極めて厳正に実践できるのを証明することにあります。”（『シャミナード師の手紙』第 2 巻、n. 388）

<sup>63</sup> 『生活の規則』“本会の起源”



としてだけでなく、また、私たちの宣教の基本的手段として、力をこめて強調しています。

**会員は信仰によって生かされた共同体において、  
心と魂を一つにして生きた  
エルサレムの最初の共同体を理想として生活する。  
こうして会員は、キリストの現存の証人となり、  
今日なお福音を、その精神においても文字においても全面的に、  
生き得ることを明示したいと願う。<sup>64</sup>**

マリアニストの生活は、教会にとって本質的なこの共同体の性格を、教会のミッションにもたらそうとするものです。個人主義、個人的利益の追求、何にもまして自分自身の欲望の充足に彩られた現代世界にあって、私たちは何よりもこの共同体の特色を守り、心をこめてそれを保持しなければなりません。私たちを取り巻き、その汚染から私たちも無傷ではないこの文化に直面している私たちは、養成の第一歩から老年の最後の日に至るまで、私たちは“共同体”と呼ばれる共通の宿舎に住んでいる個々の宣教者たちのグループではなくて、共同体の中で、共同体のために生きている宣教者であり、“主の福音に基づき、祈り、友愛、財産、労働、成功、困難などすべてをともに分かち合う新たな家庭を形成していること”<sup>65</sup>、共同体自身のためではなく、共同体に託されたミッションのために生きていることを絶えず念頭に置かねばなりません。“会員はすべて、固有かつ独自の仕方で、本会の単一の使命の実現に貢献する。”<sup>66</sup> この私たちのカリスマの本質的な領域に向かつての私たちの献身と配慮を通して、私たちマリアニストは教会の中における私たちの存在理由、それに自分たちの生活だけでなく、私たちのミッションの有効性と質を

---

<sup>64</sup> 『生活の規則』、9条。『生活の規則』第9条に続いて、共同体の生活についての最初の第34条は次のように述べています：“マリア会の共同体は、マリアと一致し、聖霊に満たされていたイエスの弟子たちの最初の共同体の再現に努める。会員が共同生活を送るのは、神の愛の証人となり、聖徳に進み、宣教の使命を達成するためである。”

<sup>65</sup> 『生活の規則』35条。

<sup>66</sup> 『生活の規則』70条。

賭けているのです。

**共同体自体が、使命達成の基本的な手段である。  
会員は、ことばより行ないが大きな影響力をもつことを知っている。  
それ故、会員は、信仰の分かち合いの生き証人となる方法を  
共同で探し求める。<sup>67</sup>**

このような宣教的精神に生かされているので、私たちマリアニスト独特の共同体は、自分自身の中に閉じこもってしまうことはできません。これらの共同体は拡大するよう召されており、順繰りに、共同体の生活を、そして、より広範な共同体を生み出すものでなければなりません。“マリア会は、全マリア会としても、各共同体としても、自らを常に宣教活動の状態にあるものとみなす。会員は、生ける信仰の**人と生ける信仰の共同体**を養成して、キリスト者をふやす使命を授けられている。”<sup>68</sup> そうなるためには、周りにいる人々とマリアニストの共同体の中でその生活の精神を分かち合うために、私たちは自分たちのドアを開かねばなりません。

私たちの生活とミッションを特に活気づけるこの共同体の精神を普及させることから生じる第一の結果は、私たちが“マリアニスト家族”と呼んでいるあの“より広範な共同体”の誕生に向けて私たちが独特な貢献をなすことです。『生活の規則』が次のように述べていることを私たちは忘れることはありません：“マリア会と汚れなきマリア修道会の創立の主要な目的の一つは、マリアニストの精神が自分たちの共通のきずなであると理解するあらゆる身分のキリスト者から成るより広範な共同体を、永続させ、発展させるためである。”それゆえに、“会員は、キリスト者がマリアニストの精神を生きることを目指す共同体を形成するよう、彼らにとって魅力的な存在であることを目指す。会員は、これらの共同体の固有の性格と自律を十分に奨励しながらも、これらの共同体に奉仕し、種々の役務を果たさなければならない。……“相互に補充すべき

---

<sup>67</sup> 『生活の規則』67条.

<sup>68</sup> 『生活の規則』63条.

任務”に基づき、同じ精神に生かされて、私たちは“教会の共通の使命を促進するために協力する”。<sup>69</sup>

私たちの共同体をマリアニスト家族に対して、また、私たちが教会においてミッションを分かち合っている信徒に対しては特別な形で開こうという呼びかけは、現在特別に緊急なものとなっています。第二バチカン公会議以降の信徒性に関する覚醒以来、世間にあつて自分たちの召命とミッションを生き抜くために必要な兄弟関係と霊性を見出そうとする本物の信徒共同体、信徒運動のグループが、その起源と精神からして信徒的である修道生活の周りにどのように生まれてきたか、私たちは目撃して来ました。多分、これは聖霊が招いておられる一つの“時のしるし”ではないでしょうか。

生き生きとした修道生活のミッションに信徒と共に取り組むことは、現在の召命の減少状況に起因する必要性というだけではありません。むしろ、それは神からの真の賜物であり、いつもそうであるように、神は人類史の浮き沈みに際してご自分を示され、それらをその救いの計画の中に統合されるのです。聖霊はこの賜物によって、社会的奉仕の仕事はその性格からしてまさに信徒的なものなので、修道生活がその始めから方向付けられてきた“社会的”な奉仕の分野は修道生活に独占的なものではないことを悟らせてくださるのです。と同時に、聖霊は、信徒に対する“より内面的”、“より教会的”他の種類の奉仕にも宣教的な推進力を失うことなく取り組むようにとの呼びかけに対して、修道生活が敏感であるようにしていただきます。これは、修道生活が教会の教化、更には改革のために常に捧げてきたあの特別な貢献を、このような形で行うようにとの呼びかけなのです。

私たちマリアニストは、そのカリスマと歴史から見て、この呼びかけに対して特に敏感です。最近開かれた総会は、いずれもこの点を明確に打ち出しています。私たちマリアニストがそのミッションにおいて頼りと

---

<sup>69</sup> 『生活の規則』1-1条~1-3条.

する手段を示しながら、2001年の総会が“教会奉仕への献身”の項で述べていることを思い起こすだけで十分でしょう。“私たちは教会の再建に心を砕く。私たちは教会における信徒の役割を心から承認し、教会の根本的な本性を「位階的制度」である以上に「家庭」であり「神の民」である点に見る。”そして、次のように付け加えています。“シャミナード師は、自分を‘信徒の預言者’であると意識するだけでなく、教会のあらゆるメンバー間に平等、交わり、参加という新しい関係をどのように作ったらいいかを知っていた。彼は教会を、マリアの子イエスがその中心を占める‘共同体のネットワーク’、として理解していた。聖フランシスコがその時代にもっていた‘教会を再建する’というこの使命は、現代の私たちにとって特別に強い呼びかけとなる。イエスが教会に望まれるようなあるべき姿を教会がより良く映し出すのを手助けできる要素を、私たちは、マリア会として、また、マリアニスト家族として持っていると思えます”（『聖霊に派遣されて』24e）。

---

教会のミッションに対する私たちマリアニストの独特の貢献を明確にする要素とは何でしょうか？私たちはこの質問をこの長い章の冒頭に投げかけました。カナのマリアを感想しつつ、私たちは次のように答えました：“先立って”の現存、貧しさに対する同情に満ち希望あふれた配慮、神の言葉に対する信仰の従順を求める熱意、そして、共同体のあかしです。このように明確にされているミッションのため、私たちは聖霊によって教会の中に現れてきたのです。これが、教会がどのように私たちを承認し、どのように必要としているかを示しています。以上のことから、これらの特徴は、私たちのミッションが具体化される事業のタイプ、そして何よりも、それらの仕事の中での私たちのあり方、活動の仕方を識別する上で、私たちを助ける基準とならなければなりません。

## 5. マリアニストの福音宣教におけるマリア

マリアはマリアニストの宣教の源泉であり、常に立ち返るべき基準点ですが、これまでの章において、私たちは、そのマリアニストの宣教においてマリアが占める重要性を検証することができました。とはいえ、私たちの宣教におけるマリアの現存は、単に今述べた役割を果たすことに限定されるのではない、ということをお願い起ささないでこの考察を終るわけにはいきません。マリアは私たちマリアニストの福音の告知そのものの中にも現存していて、告げ知らせる対象でもあるのです。堅忍の誓願によって、私たちはマリアのミッションにおいて彼女を助けることを契約するだけでなく、“マリアを知らせ、愛させ、また、マリアに仕えさせる”<sup>70</sup> ことをも契約するのです。

この契約を私たちは必ずしも正しく受け入れているとは限りません。私たちのある人たちは、私たちのミッションにおいて、誰もキリストに相応しい場をマリアに与えることは出来ない、キリストこそ私たちが“知らせ、愛させ、奉仕させる”べき唯一の方であると考えて、これを受け入れ難いとさえ見なします。またある人たちは、善意をもって受け入れるのですが、あたかもそれが福音の告知に付け加えられた何か“余分なもの”でもあるかのように見なして、全体の中に位置づけないのです。ですから、このことの意味を理解しようとして、考察にひと時を過ごすのは価値あることだと思います。

先ず何よりも、この表現が、1839年8月の黙想指導者に宛てた手紙の中でシャミナード師が示した、あの私たちのアイデンティティーの定義と堅忍の誓願の意味とに遡る、ということを私たちは心に留めなければなりません。“私が、私たち両修道会にとって固有な特徴として見なすもの、そして、これまでの修道会に前例がないと私に思えるもの、それは、繰り返しますが、マリアのみ名において、マリアの栄光のために、私た

---

<sup>70</sup> 『生活の規則』15条.

ちが修道者の身分を進んで選ぶということです。そうするのは、至聖なる母マリアによってしか、私たちは人々をイエスに連れ戻すことは出来ないと確信するので、**マリアを知らせ、愛させ、奉仕させる**ために私たちが身も心もすべてを彼女に捧げるためなのです。”<sup>71</sup> 従って、マリアニストは福音を宣べ伝えるに当たってキリストに相応しい中心的な場をマリアに与える、ということではなく、私たちは、創立者のインスピレーションに導かれて、キリストをより良く告げ知らせるために、マリアを私たちの福音告知の中に現存させる必要がある、と理解してきたということです。

事実、マリアは、受肉の現実性をもって、キリストの福音宣教を正真正銘現実のものとされるのです。このキリストの福音宣教は、マリアと共にあるとき、思想の領域に留まってしまうという危険性から、つまり、イエスという人物の秘義よりもその教えの方に私たちの視線を向けさせることによって、イエスという人物を一種の“教義の説教者”に縮小する絶え間ない危険性から逃れることが出来るのです。何故なら、福音の中核と本質を成しているのは、イエスの教えではなく、イエスという人物の秘義だからです。キリストの福音宣教はイデオロギーでも、道徳的な教えでもないのです。

“マリアはこの逸脱から私たちを守ってくれます。私たちが世に告げ知らせるべく召されているのは、その告知の対象、生きておられる方、キリストであること、をマリアは私たちに思い起こさせてくれます。それはイデオロギーを説くことではないし、哲学者たちの神を告げることでもありません。私たちの信仰は漠然とした理神論とは何の関係もないのです。私たちはある思想や抽象的な理論、或いは、正しく生きるための知恵の宣伝者ではありません。そうではなくて、私たちは、真の神の子であり、一人の女性から生まれた真の人の子である生きておられるキリストを告げ知らせるのです。私たちが告げ知らせるのは、マリアがこの世にお生みになり、人間性において私たちの兄弟、人間の中でも完全な

---

<sup>71</sup> 『マリアに関する記録』第2部、77。

人間であるイエス・キリストなのです。イエスを一つの思想 — たとえそれが神の思想であるとしても — に縮小することは不可能です。私たちが告げるのは人となった神、人間的な神、人である神です。マリアは、このイエスの人間性が意味する現実性へと、絶えず私たちを導いていくのです。”<sup>72</sup>

さらに、福音を告げ知らせることはこれで終わらないことを心に留めなければなりません。それはイエスという人物の秘義を告げ知らせることに限定されません。もしそれが福音として告げ知らされるとすれば、それはこの秘義が私たちに与えられていて、私たちがそれに参与できるからなのです。もしキリスト教が単に教義を受け入れることだけではないとすれば、キリスト教はイエスという人物についての単なる信仰告白ではなく、むしろ、私たちがキリストにおいて確信する諸秘義を自分のものとする事なのです。これは恩寵に支えられた信仰の秘義、信仰から湧き出る恩寵の秘義です。マリアは、まさに、このことを私たちに啓示するイコン（肖像）なのです。

私はここで、キリスト教生活の秘義の啓示においてマリアが占めるこの位置を説明するために、カール・ラーナーの文章を引用したいと思います。彼はこのことを次のように見事に述べています：“キリスト教とは何でしょうか？・・・キリスト教とは人間が考え出したり、発明したりしたものではありません。人間が自分自身の力で神に近づくことでもありません。それは、第一義的には、私たちが自分自身の力で守るようと神から与えられた掟の実行でもありません。キリスト教とはむしろ、生ける神が私たちとの関わりにおいて行われる業、すなわち、赦し、贖い、義化、そして、神ご自身の栄光の交わりにおいて、生ける恵みの神が私たちに与えてくださるすべてのことを意味します。しかしながら、神が与えてくださるものは、要するに、創造された賜物ではなく、神ご自身であるので、キリスト教とは、最終的には、端的にいつて永遠の神ご自身であり、人間のところに来られ、恩寵によってこの人間に影響を

---

<sup>72</sup> Godfried Danneels 枢機卿, *Le feu de l'Esprit. Paroles de vie... Pentecôte* 1987, p. 13.

及ぼされる神ご自身に他ならないのであって、それは、三位の神の栄光に満ちた無限の命全体がこの小さな被造物の貧しい心に入って下さるように、人間が自分の心を自由に開くためなのです。・・・理想的なキリスト教とは何でしょうか？ 理想的なキリスト教は、永遠なる神、神ご自身であるこの賜物を、恩恵によって与えられる自由を用いて、全身全霊、存在全体の全能力をあげて受け入れることに存するはずで、人間の全存在、全所有、全ての行動、全ての苦しみを挙げて受け入れるのですが、それは、このように神を受け入れることが、彼の本性全体と全生涯を神の永遠の生命へと導くためなのです。理想的なキリスト教は、私たちの公的な行為、つまり、歴史の中で世界に公に現われるものと、私的な行為、つまり、良心の内奥に起こることが、完全に一致し、対応することを意味するものでなければなりません。キリスト教生活の内奥で起こることが見えるものとなり、逆に、目に見えるもの、世の中に現われたものが、魂の内奥で、神のみ前で起こっていることを真に反映するので、理想的な姿のキリスト教は、また、キリスト者のその理想的なキリスト教が無条件で他の人々の救いに奉仕する、ということの意味するものでなければなりません。・・・私たちは、マリアが理想的なキリスト者の実現そのもの、完全なキリスト者だということが出来ますし、またそう言わねばなりません。・・・彼女はまさに完全なキリスト教徒であり、最も完全な形での贖いそのものが実際にどういうことを意味するのかを、典型的に表現しておられる方です。・・・マリアは、教会の意味、恵みと贖い、神の救いを明示する肖像なのです。”<sup>73</sup>

ですから、福音の告知においてマリアが不在であれば、例えば教会、恩寵、贖い、神の救いといったキリスト教生活の基本的現実の持つ真の重要性は薄れ、ぼやけてしまうように思います。マリアなしに、私たちはどのように福音を宣べ伝えることができるのでしょうか？ ですから、マリアは、キリストと福音を宣べ伝えることにとって何の障害にもならないだけでなく、逆に、不可欠な存在となるのです。更に、彼女は“付け加えられた者”ではなく、主要人物です。教会の歴史に思いをはせながら、

---

<sup>73</sup> Karl Rahner, *Mary, Mother of the Lord*, New York, Herder, 1963, pp. 35-37 (英語訳よりの引用文).



シャミナード師は正しくも次のように思い起こさせてくれました。“全ての異端は聖なるおとめマリアの前に膝をかがめ、マリアはそれらを徐々に忘却の沈黙へと消滅させました。”その後、“現代の勢力ある異端”について述べてから、師は付け加えます：“マリアの力は衰えてはいません。私たちは、マリアが、他のすべての異端に対してと同様に、この異端に対しても勝利を収められると固く信じています。”<sup>74</sup>

従って、私たちの福音宣教にマリアが現存することは、見せかけのもの、不必要なもの、周辺のものではありません。キリストのこの世への到来をもって始まった福音宣教の一手段として“マリアを知らせ、愛させ、奉仕させる”という私たちの任務には、しっかりとした土台があります。しかしまた、その堅固な土台に信頼するためには、その任務は、実行に当たって、正しく遂行されねばなりません。別言すれば、“彼女を知らせ、愛させ、奉仕させる”どんな方法でも正当で適切であるということではなく、今まで見てきたように、真に福音を宣べ伝えるために奉仕するものだけがそうだということです。このように、相応しい形で“マリアを知らせ、愛させ、奉仕させる”ためには、私たちが彼女に捧げる信心、崇敬の場合と同じように、私たちはマリアについての知識を正しく育て、形成するために、特別な配慮をすることから始める必要があります。こうして初めて、私たちはこれを人々にも伝えることが出来るのです。

この二つの回章をもって、私は特に私自身の個人的な貢献を皆さんにしよう努めてまいりましたが、それは、聖母マリアが私たちの間でもっともっと“知られ、愛され、奉仕される”ためです。二つの回章は何年にもわたる長い考察の旅の実りです。皆さんがすでに気づかれたことと思いますが、これらの考察は、私が自分の道を辿る助けとなってくれましたし、また、二つの基本となる基準が、二つの道路標識のように、私の辿る道に沿って導いてくれました。ここで皆さんにこの二つの基準をお知らせしようと思いますが、それが皆さんのお役にも立てることを願っ

---

<sup>74</sup> 『マリアに関する記録』第2部、73-74.

ております。

一番目の基準は、私たちは、マリアをマリア自身において考察するのではなく、キリストに起こったことと関連して考察する時にだけ、マリアについての知識を獲得することが出来るということです。“時が満ち”、み言葉が受肉して現われ、私たちが“新しい契約”と呼ぶものが始まったその瞬間から、神と人類との間に起こったことを深めて行く時、私たちはマリアに出会います。従って、キリスト教のメッセージの“追加の章”のようにマリアに近づくことは、それがどんなものであれ、私たちをどこにも導いてはくれません。私たちが生き、宣べ伝える福音は、御父、御子、聖霊、教会、人類、恩寵、・・・そして“これらに加えて”マリア、についてのメッセージではありません。マリアの提示、尊崇、信心は、キリスト教の秘義全体の提示、尊崇、信心の中に刻み込まれねばならないのです。マリアは単に“付け加え”られることができない存在なのです。<sup>75</sup>

第二番目は、マリアを告げ知らせることは、神のみ言葉に基づいていなければならないということです。もし私たちのマリアへの焦点の合わせ方が聖書に基づいていないなら、私が先の回章で言及したように、推定及び心理的、社会学的主観の投影に由来する、過剰な或は不十分などちらかの、歪んだマリアのイメージを生み出す危険に陥ることになります。聖書に基づくという道のみが、神の計画の中に組み込まれたマリアへと私たちを導くのであり、マリアという人物を考察するに当たっての局大化と局小化から私たちを守りつつ、私たちが彼女をこの神の計画の真の“啓示の場”として観想することを可能にしてくれるのです。“代々の人々が”マリアについて語り、また語り続けていくでしょうが、それは、彼女のためではなくて、彼女において、彼女と共に、“力ある方が偉大なことをなされたから”です。これらの“偉大なこと”はまさに神の言葉の光の中に啓示されるのであって、私たちの人間的憶測の光の中にはありません。私たちには、神の言葉の研究と観想が不可欠なのです。

---

<sup>75</sup> 『マリアーリス・クルトゥス ―聖マリアへの信心について―』(井上博嗣訳 中央出版社 1976年)、序文、nn. 24-28.

私たちがこの道を辿り続ければ、私たちは更に深くマリアについての本物の知識に分け入り、そして、私たちの生活とミッションにおいてマリアの現存が中心であることを、もっともっと発見することになると私は確信いたします。

---

親愛なる兄弟の皆さん、私はこれら二つの回章が、というよりも、二部から成るこの一つの回章が、私たちのカリスマの生き方を再活性化するのに役立つものとなることを願っております。長い回章となってしまったことをお詫び致します。でも、これは十分な根拠に基づいた、豊かな発展をもたらす主題である、と私は信じます。考察すべき事からは非常に豊かですが、もし私たちがこのテーマを少しずつ吸収するための時間を取ろうとするなら、不消化を避けることができます。

いったん消化すれば、考察した事からは生命を養い、全てのことが最終的にはより深く、より単純なものに、あるいは、より深いだけにより単純なものとなっていきます。最近、フランス管区を訪問した際、私は前回の回章をもとにして、ある年老いたブラザーと、長い年月をかけて彼が消化し、吸収してきたマリア的体験について、時間をかけてお話しする機会がありました。その会話は、マリアニストであることに関して会員の精神を広げ、感激を新たにするような会話、の一つでした。彼は、そのことが一つのテキスト付きの単純なデッサンに表現されたものを、私に手渡してくれました。私はそれを引用すると彼に約束しましたので、今、そのテキストを皆様にご紹介します。

マリアは私に言われます：

この困難な世の中で、

あなたがイエスの道を辿ろうと思うなら、

私と一緒に来なさい、

私はあなたを彼のところに連れて行ってあげましょう

そして彼はあなたを御父のところへ、

あなたの兄弟である人々のところへ、  
“約束の地”へ連れて行ってくださるでしょう  
そこであなたは愛する喜び、  
愛される喜びを味わうのです。

これをあなたは望みますか？  
それでは、あなたもまた  
他の人々のために道となってください！

人類の救いのためにマリアの子となられた神の子イエス・キリストにお  
ける皆様の兄弟、

マリア会総長  
マヌエル J. コルテス, SM  
教皇派遣宣教師

2008年3月31日  
神のお告げの祭日